

三好昇は理解者でありたい

Feldelt

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「緋月昇は記録者である」続編、ようやく開始です。

勇者の章のその後の物語です。

緋月昇の新しい話が始まる。

二部構成になっております。

第一部は勇者の章直後の大赦メインの話

第二部は三好昇が出てきます。

目次

第一部 緋月昇の戦いの続き

第1話	普通を謳歌して	1
第2話	左遷じゃないのかな	6
第3話	白く冷たい世界の中に	10
第4話	銀と世界と銀世界	13
第5話	洞窟の主	17
第6話	雪と花と木と	19
第7話	白のベールは剥がれて	22
第8話	狂気の正気	26
第9話	北の地にサヨナラを告げて	28
第10話	それは人に在らざる	31
第11話	夢だとしても	33
第12話	魂より出ずる力	37
第13話	私の太陽は	40
第14話	十字架は俺だけで	42
第15話	夢でなら、夢だったなら	45
第16話	あなたは、あなただけは	48
第17話	久々に高校へ	51
第18話	蓄積された痛み の渦	55
第19話	幸せの資格	59
第20話	そばにいさせて	62
乃木さんちの今日のごはん		
第1話	緋月昇のこだわりラーメン	67
1. 5部 緋月昇の原点へ		

第1話	大赦公安部	73
第2話	依頼と仕事と家事と仕事	76
第3話	終わらぬ戦い	80
第4話	緋月昇以外の憂鬱	84
第5話	車いす紀行、日常編	87

第一部 緋月昇の戦いの続き

第1話 普通を謳歌して

神世紀が終わりを告げ、新たな暦として人暦を採用して1年、緋月昇は大赦書史部に復職していた。しかも記録課長に昇進もしていた。「それで最初の仕事は調査隊の報告書整理ですかい… 1年経って東北地方つてどこか…」

「緋月先輩、管理職なんですからどんと構えてください…」

「昇進したばつかだつての… っていうか口より手を動かせ楓花、腕二本あるなら俺より早く整理できるはずだろ…」

「先輩が左腕だけで早すぎるんです、私が一枚確認してる間に二、三枚さくつとできるのが…」

「手を動かしてるからだよ… といいつつ楓花、与えられた分は仕上げてるじゃないか。」

「先輩の配分が完璧なんですよ… 毎回定時5分前に終わる配分なんてそうそうできないです…」

そうだろうかといわんばかりに首を傾げる。緋月昇にとって周りを見ること、それはあらゆることを判断するための材料となる。

後輩である陽本楓花の癖は昇にとってはわかりやすいものであった。ときたま話すことに意識が削がれて手元がおろそかになりがちなのが玉に瑕である。

「まあ、そういう”見る”ということでもうにかなる判断は得意分野だからな… つと、電話が来た… もしもし緋月です。」

「ひいづきいいい！数学教えてえええ！」

「仕事なのですが… それで、数学のどこです？」

机の上の本棚にある高校の教科書から数学ⅠⅠを選びパラパラとめくる。この時期は多分数学ⅠⅠの最初の方だろうな…

「三角関数よ！なんなのあれ！」

「三角関数ですね… あれ、先輩三角比はできますよね。その延長じゃないですか。」

「それができないのよ！」

「ええ……まあ、わかりました。てことはラジアンがわからないんですね？」

「さすが緋月、わかってるじゃない！」

「そこ、誇るところじゃないです……樹にプリント持たせますので家で解いて夏凜に明日渡してください。教科書レベル2問と緋月スペシャル1問おまけで。では。」

「ちよ、緋月!？」

通話を切り、ひとつ息を吐く。数学ⅠⅠの教科書を本棚に戻し、仕事に戻る。

「……またですか。」

「ああ、まただ。楓花、少し頼まれてくれるか？」

「三角関数ですね……わかりました。」

楓花に数学ⅠⅠの教科書を手渡し、問題を制作させる。その分、楓花に回していた書類を受け取り、机に戻って整理し始める。

「にしても、私が勉強得意ってことまで先輩はお見通しなんですわね。」
「俺が言えたことでもないが、その年で大赦書史部記録課に配属されるほどだ、俺より賢いはずに違いない。」

「うっ……先輩ほんとそういうところですよ、ナチュラルに褒めたりしたり躊躇なくかわいいって言ったり……はい、問題できました。印刷しますね。」

「おうよー。まあ、俺はそういうところがあるって何度も言われてるから今更感はある。あと20分だ、それぐらいの量ならいけるだろ。」
「いけますよ。」

「んじや、手を動かしてもらおう。」

「で、先輩。プリント刷ったはいいものどう渡すんですか。」

「勇者部に行く。そのほうが確実だ。」

「へえ… って、普通に中学校入っていいんですか!?!」というかあの勇者部ですよ!?!」

「あー、楓花は讃州中学じゃなかったか。まあいいや。勇者部はただの部活だよ。世のため人のためになることを勇んでする部活、だから勇者部。そこにたまたま、結城友奈はじめとする勇者様だった少女たちがいただけなのさ。さ、着いたぞ。樹ー、いるかー」

「ここが、勇者部…」

「ようこそ勇者部へ…!?!って、ひーくん!?!」

「… なんで高校生が紛れてるんですか友奈君… それに東郷… まあいいや。樹にこれ渡しといて。風先輩の補習プリント。」

「おー… じゃあひーくん、今度私と東郷さんに英語を教えてくださいな
いかな…」

「嫌よ! いくら友奈ちゃんの説得といえども敵性言語は話せないわ
!」

「いつの時代の人間なんだよ… って、おーい、楓花ー、どこ行ったー
?」

「楓花…?」

「書史部の後輩、というか部下というか。学問優秀で話し始めるとなかなか止まらないやつ。いずれは俺より出世するような器だよ。」

「すごいんだね、その、楓花ちゃんは!」

「そうだな。多分楓花は部室の外の壁にもたれてフリーズしてると思うよ。俺は慣れてるけど、向こうからみればここは世界を救った英雄だらけの部屋なんだからな。」

「いや、緋月君が褒めちぎっているのもあるんじゃない?」

「そうですよ先輩…」

そんなこと言ってもねえ、なんて喉まで出かかったがやめた。夕日が写る楓花が可愛かったからである。やれやれ。

「… まあいい。樹にこれを渡しといてくれ。先輩への宿題だ。なぜ園子じゃなくて俺に聞くんた…」

「先輩!?!今園子様を呼び捨てにしました!?!」

「んあー、話せば長いがそうだな。だったら今から会いに行くことも

できるぞ。」

「ええええ!?!」

実は1年経っても間借りしたまんまなんだよなー…。あの広い家に園子と使用人さん達だけじゃ持て余しそうだし…

「んじやそういうことで。一応聞くけど友奈、夏凜はどうしてる?」

「夏凜ちゃんは今日は早く帰るーって言ってたよ、園ちゃんと色々お出かけするみたい。」

「なるほど仕事でよかった。んじやなー。」

「ちよ、えー…。えっと、失礼しました!」

おもむろに去る俺と挨拶をすてついでくる楓花。それを見守る友奈と東郷。

人歴2年の五月の半ば。

緋月昇の新しい話が始まる。

帰路について数分後、楓花が声を出す。

「先輩、その、園子様にお問い合わせに行くこともできるって言ってたじゃないですか。」

「そだな。」

「アポ取らなくていいんですか?」

「俺はいらなかな。楓花連れてくとは言ってないけど大丈夫でしょ。さ、乃木家に着いたぞ。」

「うわー、すごい豪邸…。」

1年もいれば見慣れるんだよな、これ。

慣れとは怖いものだ。

「おかえり〜のぼるん〜」

「昇、帰ってたのね。」

突如として後ろからかけられた声。

楓花は驚いて声の方へ振り向いた俺の背に隠れた。驚きすぎか。

「昇…。その女誰よ。」

「おおく？のぼるんも隅に置けないね」

「二人してうちの後輩を脅さないでほしいなあ…特に夏凜。覚えてろよ。」

「のぼるんの後輩かく、あれ？てことは大赦の人だね」

「そうだよ…とりあえず中に入らね？」

「そうね…って、そういうのを園子が言うのよ。」

「えへへ」

「とまあそんな感じだが…楓花、これが乃木園子と三好夏凜だ。」

「先輩の肝が据わりすぎてます…」

「実は1年ここに住んでるからね。慣れてるのさ。楓花、確か寮だったけ。」

「はい、そうですが…」

「おう、うちで面倒みるよ」

「ええええ!?!いやいや滅相もないです!」

「え、女の子増えて楽しいんだけどな」

「ですが園子様、お言葉ですが…」

「ふーちゃん敬語禁止」

「ええええ!?!」

「気に入られたわね…諦めなさい、園子はこうなると手がつけられないわ。」

「そだな。さ、日が沈むぞ。続きは中で。」

ちなみにその日の夕食はなんか量が増えた。

乃木家はまた1人増えることになったし、手伝いの量も増えた。

まあ、俺の独断だったしね。

夏凜や楓花はなんで片腕で両手相当の動きができるんだと言うが、それはまた別の話だ。

第2話 左遷じゃないのかな

翌朝、仕事を始めるかと思った矢先に楓花から呼び出しの連絡がきた。

「せんぱーい、技術部と人事部の方が来てますよー、なんでも先輩に要件があるそうで。」

「通してくれ、こっち今書類振り分けてるから。それよりなんで人事部が…。」

「知りませんよ、通しますね。どうぞー」

楓花と軽いやり取りをした後、技術部の職員がアタッシュケースと医療用ギプスを持ってきた。

「…完成したんですか。」

「ええ、試作品ですが。」

「試作品といえどあの園子様監修の義手ですよ。慣れてきたとはいえ、やっぱり不便ですから助かります。」

「本当ならちゃんと腕としての機能を持たせたい、と。」

「園子様らしいです。」

アタッシュケースの中にある金属製の義手。

園子が俺に必要と思われる機能を詰めたもの。

「あれ、これは追加パーツ的な何かですか?」

「さすが鋭い。これは義手の拡張パーツで、外出時のもしものためにアンカー、ライト、そして電磁石を切り替えできる装着型アタッチメントです。」

「義手に書類整理モジュールあるのだけでありがたいのにそんなものまでつけたんですか…?」

「園子様のご意向です。」

「何考えてんだあの子は…。」

乃木園子の思考回路は読めない。

いくら俺が観察すること、それをもとに考えることを得意としていても、乃木園子の考えはわからない。だから寄せられた好意にも、内に秘められた悲しみも、読み取ることができなかった。

「考えたところで無駄か…で、こっちの医療用ギプスは義手を隠す用…もといアタッチメントをつけた時の重量を支えるため、ですね。」

「その通りだ。」

「てことは両方受領した旨の書類にサインしなきゃですね。」

「全く…君はどこまで読んでるんだい？」

「まあ、おおよそですね。」

「じゃあ、これを。」

「はい、受け取りました。」

受領書にサインをして技術部の人は帰っていった。

次は人事部の人であった。

「緋月昇様ですね、辞令をお持ちしました。」

「はい。」

辞令…なんだろう。俺を書史部から動かすとは考えがたい…

だとしたら…思いつくのは一つしかない。

「貴方は本日より一週間後、記録者として本州調査隊に配属されます。」

「…わかりました。」

一度芽吹に否定された調査隊参入。

このタイミングでもう一度、ということはやはり義手の完成が一番の要因か。

確かにアンカーやライトは未開の地に赴くには必須の装備だ。となると園子は知っていたのか。俺が配属変更になることを。てことは夏凜にいろいろ言わんとだな…

「先輩、異動ですか？」

「そうらしい。しかも場所は本州調査隊…つまりは元防人隊というわけだ。」

「報告書によると今調査隊は北海道と呼ばれていたところにいるようです。」

「文献で少し読んだことがある。四国よりもずっと北、海峡を越えた先にある大きな島。それが北海道だ。」

「一週間で間に合うんですか？」

「高知から船で向かうらしい。一応往復できる燃料はあるっぽいしな。」

「へえ…。 って、それどころじゃないんだった、それじゃあ書史部はどうなるんですか!?!私だけじゃどうしようもありませんよ!?!」

「あ…。そこは園子に聞いてみる…。 とりあえず仕事だ。憂うのはまだあとでいい。」

「そんなあ…。」

「なんて話があつてだな。」

仕事を終え、乃木家一室で夏凜と園子に話をする。

「はあ!?! ってことは昇、しばらく帰ってこないってことじゃない!」

「おお、にぼっしーデレだねえ」

「違うわよ!べ、別に昇がいなくてもなんとかできるわよ。」

「へいへい…。 真偽はさておくとして、俺がいないと大変だとほざく楓花のほうが俺は心配なんだ。書史部は今俺と楓花しかいないからな。」

「…。 のぼるんのタスク処理能力があるから今の書史部は成り立っている…。 それは大赦全体の見解なんよ。それでものぼるんを本州調査隊に送った方が向こうの調査がはかどると判断した…。 その理由はね。北海道には、つい最近まで人が生きていた痕跡があつたんだ。」

「…。 なんらおかしいことはないだろ。壁の外は時間が止まっていたんだから。」

「私も最初そう思ったんよ。でも、不自然なの。調査隊の報告書、のぼるんも最初期のほうは読んだことがあるはず。」

「ああ、バーテックスに殺された人間の遺体が散乱していたと、あつた。」

「それが、旭川…。 今調査隊がいるところにはないんよ。」

「…。 それはおかしいな。」

「なんでよ、殺される前に逃げたとかもありえるじゃない。」

園子は首を振る。

「そうだったらよかったんだけどね…少し離れたところに、つい最近できたような簡易的なお墓があった。それが最新の報告。だから、のぼるんの目と耳がほしいんよ。」

「俺は探偵か…けど、なるほどな。確かにそれはこの目で見ないと。もしかしたら、生存者がいるのかもしれないし。」

「そうだね…。」

「というわけだ、夏凜。まあ俺はこれっぽっちも心配はしていないが…楓花は心配だ。園子、書史部への追加配属とかないのか？」

「晴信さんが行くって言ってるんよ。」

「兄貴が!？」

衝撃的だが緋月昇の穴を埋めるという点で三好晴信以上の適任は
いない。

園子は学業があるのだし。

「なるほどなあ…さすれば書史部は回ると、そう踏んだのか。」

とするなら楓花に回すタスクの量を今から少しづつ増やすか。

「安心して次の仕事へ行けそうだ。ありがとう園子。」

左遷じゃないのかなとも思ったが思えば今の太赦の長は乃木園子
なのだ。

適材適所を見抜く力は俺以上だろう。だから俺はその信頼に応え
るべく、北に向かうことにした。

第3話 白く冷たい世界の中に

辞令交付から一週間後、緋月昇は苦小牧に上陸していた。

「先輩…ここ寒くないですか!？」

「説明しただろうが…なんでついてきたんだよ、楓花。」

何故か、陽本楓花もついてきて。

「だって、先輩がいないと書史部の仕事量に耐えられないです!」

「そんなことはないだろ!何のための晴信さんだよ!あの三好晴信さんだぞ?!」 楓花がいなくてもなんとかなるか…」

「それはナチュラルにひどいです…」

「めんどくさいこつて…さて、とりあえず物資だが…その電車に乗せればよさそうだ。見た感じシステムは動いてるし…つて、あれは…」

電車の運転席。見覚えのある銀髪。

かつて防人だった少女。

「山伏しずく…よし、楓花!」

「はい!」

「いい返事だ、持ってきた物資の確認と列車への積載指示、頼むぞ。」

「私ですか!？」

「俺がなんでもするわけにはいかないのさ、ここからは。」

「…わかりました、これをそつちに積載します!」

楓花の号令で積載が始まる。

俺は運転席に向かうことにした。

「ん、緋月。楠が言ってた通りだ。」

「さすがは元防人隊長…わかってたのか。」

「いまの緋月はいろいろ持つてる、楠はそれを待つてる。」

「だからこの腕の機能…なるほど芽吹の要望か。」

園子のごり押しで作った機能ということは知らされていたが…

てことは園子はこのことを知っていたんだな。相変わらず読めんな。

「先輩、積載完了しました。」

「早いな…」

「なんかみんな張り切ってますよ。」

まあ楓花は夏凜や園子と同様普通に美少女だからな……積載班には癒しだろうて。

「おっけ、それじゃあしずく、現場まで頼む。楓花は少し休んでくれ。」

「はい。」

「積載班の総員撤収を確認……よし。しずく、現場まで頼む。」

「わかった。それじゃあぶっ飛ばしていくぜ！」

シズクに変わり運転を始める。このスキルはどこで手に入れたのだろう。

「先輩……なんかあの性格変わってません……!？」

「ああ、シズクだからな。長旅になりそうか？」

「そうならねえよう、全速力で向かってんだよ。しっかし、まさか楠がこんなあの動かし方を知っていたとはな……」

「先頭指揮を執る以上現場からは離れられない。だから、一番飲み込みが早いであろうシズクに任せたのか。」

「よく見てやがる。俺が間違えてもしずくがいる。しずくが間違えても俺がいる。そうしてここにいてるってわけだ。」

「さすがは楠芽吹、か。それで楓花、質問の答えだが、山伏しずくと山伏シズク、彼女たちは二人で一人。二重人格というやつだ。」

「そう、なんですか……」

さすがは俺の後輩、情報から推察されることを膨らませている。

俺みたいにはなっただけほしくないが、その力は持っていたほうがいい。

「さて、夕飯どうするかね……」

「おいおい冗談だろ、確かに食料はこの列車にはあるが調理場とか包丁とか鍋とかそこらへんどうするんだよ……まさか作るとか言わないよな……」

「包丁は自分のがあるし、調理場はがれき積み重ねるくらいでもすぐできる。というかそこらへんのノウハウは芽吹が持ってるはずだ。で、鍋だが……シズク、今現場にいるのは何人だ？」

「お前ら合わせて34人だ。」

「40人用の大型鍋をひとつ紛れ込ませてある。毎回は作れなくてもあつたかいものは作れるさ。」

「先輩の料理はおいしいですからね。」

「そりやどうも。さて、俺も少し休む。そこそこ長旅だったしな。」

「まさか先輩あの船の中で寝てないんですか？」

「起きてるに決まってるだろ…。夏凜が横にいないのに寝られるか…。」

「そういう問題なんですか…。」

それは死活問題なんだ。

三好夏凜が隣にいるかいないかで眠れるかどうかは9割決まるんだ…！

「だからしばらく徹夜テンションかもしれない…。楓花、俺がおかしくなったら殴るか叩くかしてくれ。」

「ええ…。」

「そこは俺に任せろ。」

うげえ、絶対痛いだろうなあ…。

そう思って俺はまどろみの中へ落ちていった。

第4話 銀と世界と銀世界

目覚めると列車は止まっていた。
かけられていたのは毛布。

思えばかなり寒い。動いていた時は機関室が隣にあつて、その排熱が暖房替わりになってたからな…

「起きましたか、先輩。」

「楓花か… 状況は？」

「そんな物騒なことにはなってます。しいて言うとするなら、お腹がすきました。」

「おーらい。聡い楓花のことだ、すでに調理場云々の話は芽吹にしてあるんだらう？」

「それが、もうすでにできていました。あとは料理人たる先輩を待つだけです。」

「それもう俺である必要性よ… まあいい。水は？」

「持ってきた分と雪解け水をろ過したものがあります。」

「読み通り… それじゃあ後者を使う。まな板とかの調理器具の準備は任せた。」

「すでにできてます。」

「材料は？」

「それはまだ保存状態にあります。」

「そうか… 味噌汁を作る。具は多くできないと伝えてくれ。」

「… はい！」

いつからここは料理番組になったんだ… なんて思いながら調理場に立つ。

そもそもなんでこの歳でマイ包丁なんて持ってるんだ問題が発生したりするわけだが。

「起きたのね昇君。」

「芽吹か。」

「様になつてるわね、その立ち姿は。」

「褒めてもなんも出ないぞ。味噌汁は出るが。」

「それはうれしいことを聞いたわ。それじゃあそのあとにでも、会議をするわよ。」

会議のくんだりから声のトーンが下がっている。

事は重大なのだろうか。

「せんぱーい、手伝いましょうか?」

「そうだな... 火をおこしてくれ。それで、あと必要なのは... 水か。

そこの! えっと... ポンコツ設定しかない残念かつ中途半端な防人番号だった人!」

「酷くありません!? わたくしは弥勒夕海子ですわよ!」

「すまん、記録者といえどなんでもかんでもは覚えられないんだ... で、だ。水をこの鍋の大体7割くらいまでいれてくれ。そこにいるチユン助はその補佐をやってくれ。」

「ええ!? 気づいてたの!」

「そりやそうだ。手伝ったらあったかいものが手に入って生き残れるぞー。」

「喜んで手伝わせていただきます。」

わかりやすいな... いや、俺も大概か。

緋月昇は三好夏凜がいなければ何かおかしくなるのはもはや自明なのだ。

現に、今も少し何かしらのずれが俺の中にはある。

「全く園子め... 帰ったら一日とは言わず一週間は夏凜を独り占めしてやる...」

「先輩... それは私でも引きますよ...」

「うっさい、死活問題だ。」

「はあ... 水が鍋に入りました。具材入れますか?」

「ああ。味噌は俺が入れるとして...」

その後なんやかんやもなく無事に味噌汁は完成した。

寒い土地での休憩に温かい味噌汁はしみる。

しかし、会議とは何を話すんだ... ?

「それで、昇君。あなたはここら一带を見て、どう思う？」

「どうって・・・ そうだな、辺り一面が雪に覆われているさまのことを銀世界というらしい。」

「それがどうかしたの？」

「いや、園子が見たら、と思うとね。」

「三ノ輪銀を思い出す、か。」

「見せたかったと、園子は言うよ。だから写真だけ撮っておく。でだ・・・ 芽吹。どうして俺に辺り一帯を見せる。変なところは何も・・・ 何も・・・」

「何も無い。そう、何も無いのだ。だがしかし、何か、記録者としての勘なのかどうかはわからないが、この一面真っ白な世界がどこかしら異様に見える。」

「楓花、お前はと思う。ここを見て。」

「・・・ どう、と言われましても・・・ 寒いとしかいいようがないです。ですが、四国は今春真っ盛りなんです。いくら北といつてもこんなに寒いなんてことあるんですか？雪も融ける様子もないですし・・・」

「楓花の疑問は環境条件と言ってしまえばそれで終わり。それで終わりなのだ。」

「だが、わざわざ楓花がそれで終わりの情報を出すとは思えない。陽本楓花はそういう少女だ。俺より学力が高いこの少女がそういう。」

「楓花ちゃん、でもそれは気象条件じゃないかしら。」

「やっぱりそうですよね・・・ でもそれしか思うところは・・・」

「いや・・・ お手柄だ楓花。」

「一つ、結論が出た。」

「え・・・？」

「何かわかったの昇君。」

「ここに来る前ももらった園子からの報告。今のこの雪の量。」

「間違いない、とまでの確証はないが、確かめる価値はある。」

「ああ・・・ ここら辺の近く、生存者がいる。」

「・・・ それは私も思ったわ。でも、どこを探してもいないわよ。」

「探してない場所…まさか。この雪の下ですか。」

「そうだ楓花。この季節、雪が融け始めないのは文献情報によるとおかしいことなんだ。だが、それは人間が生きていて、あらゆるところで文明を使っていた頃の情報だ。当時とは人間の量はもちろん、文明、例えば車の排気ガスなんかがそうだ。それも少なくなっている。雪が文献より多く残るのはそれが原因とみるのが一番自然だ。」

「待って、じゃあ今私たちがここで焚火や調理なんてしたら…」

「そうか…この仮説が正しいとするなら…雪崩が起きかねないのか。」

瞬間、地を這うような轟音が鳴り響く。

「こういうのフラグ回収って言うんですか!?!」

「らしい…文献によると雪崩に巻き込まれた場合…生きてることを祈れ!」

右腕の義手からアンカーを放つと同時に崩れる足元。

芽吹と楓花はアンカーを刺した木に登り事なきを得てるが俺はそういうわけにもいかず、というかむしろアンカーがよくなかった。どうにか上半身は脱出できたが、腿より下には雪というよりむしろ氷のような冷たく痛い波が絶えず襲い掛かっている。

「先輩!」

「昇君!」

もう足の感覚はない。こうなりやイチかバチか…!

「15分…雪崩に巻き込まれた人間の生存可能時間らしい。」

「いきなり何を…!?!」

芽吹の言葉を最後まで聞かぬまま、アンカーユニットを外し雪崩に身を任せる。

すぐに木が見えなくなつて、白く冷たい世界に身体が投げ込まれていった。

「せんばああああい!!!」

楓花の悲痛な叫びだけは、聞こえた。

第5話 洞窟の主

目が覚めるとそこは洞窟の中であった。

全身、こと足元には湯たんぽと毛布がある。周囲には…家具…？

「人が住んでいる形跡…しかもつい最近…」

雪崩に巻き込まれた人間の対処方法を知っているあたり…ここに住んでいた人間という認識で間違いないだろう。いや、生きているのだから住んでいるという認識のほうが正しいか。

「およ、目が覚めたかによ？」

人間の声だ。太陽の届かぬ洞窟の中で、人間の声が出ている。

「ああ、覚めたよ…助かった。だが、それよりも…」

「なんでここに洞窟があつて、なんでここに人間がいるのか、ね。はいはい。」

読まれた…!?!いや、落ち着け。

この洞窟の構造、はたから見た感じの推察でしかないが、すべての少女に合わせて作られている。つまり、この洞窟はこの少女が作ったものに他ならない。そして、見た感じ華奢な腕をしているこの少女がここまでの広さの洞窟を作る場合は誰かの助けが必要になるはずだ。しかもどう考えても一日程度では作れない。だが、ひとつだけこの洞窟に対してつじつまを合わせることのできるものを俺は知っている。

「勇者だったから、か…」

少女は背を向けたまま固まる。

凶星だったのは間違いなさそうなのだが、だとしたら…

この少女は、星屑から人間を見捨てたのか…？

「…勇者の存在を知っている…君は…何者？」

「何者、か…元大赦書史部記録課勇者様付樹海内状況記録者、現大赦書史部部長兼本州及び北海道調査隊付状況記録者、緋月昇。」

我ながらよく噛まずに言えたものだ…

「ご丁寧にも。名乗られたのなら名乗り返さなきゃだね。私は秋

原雪花。一応16歳。元勇者で今はたった一人地下生活を謳歌して
るよ。」

「謳歌、か。もう太陽は見ないのか。」

「勇者の力がなくなっても、ね。嫌なんだよ。」

かつて文献で見た天空恐怖症候群…それと似たような何かか…

「なるほどねえ…」

「けど、君の腕…星屑に食われたの？」

「そうだ。なあ、雪花。天空恐怖症候群ってやつか？」

「違うよ、でもその言い方…」

「察がいいな…これは300年の前の文献によるものだ。」

「さんびや…何を言っているのかにや？」

一応という文言から時間が停止していたことを認識していたのか
とも思ったが…そういうわけでもなさそうだ。ということとは…
壁の外の炎が時間を止めていたことは知らない…それ以前に壁の
外に炎があつたことすら…

「事実だよ。そして君は目覚めた。300年の眠りを認知していない
から目覚めたというのは少し違うのかもしれないけれど、ね。」

第6話 雪と花と木と

「なるほど、わかりやすい説明だねえ」

秋原雪花と名乗った少女はそう言いながらもまだ少し困惑の色を残している。

無理もない。ある日を境に外は三世紀分の年月が流れていましたと言われたら誰だって困惑する。

「我ながら、トンデモなことを話してるとは思ってるけどな・・・さてでは次の話としてだが、俺は地上に出て仲間と合流しなければならぬ。そこでだ。ものは相談なのだが雪花。」

「ここにある食料とか物資とかと一緒に私もその調査隊とやりに合流しないかっていう勧誘かにや?」

「話が早くて助かるよ。」

「そうだねえ・・・どのみちここにある食料も尽きるし、バーテックスが残ってないという確証がある以上、私がここに居続ける理由はないかな。」

「おーらい。そうと決まれば荷物をまとめたいところだが・・・」

「まだ結構な量あるからねー。二人じゃ運べないよ。」

「だよな・・・雪花、じゃあ出口はどこだ?」

「その扉を開けた先だよ。けどまだ雪で埋まってるんじゃないのかな」

さすが雪国、か。

アンカーユニットを切り離していなければワンチャンあったが今ここにあるのはライトユニットと電磁石ユニットだけ・・・なるほど電磁石か。

「雪花、鉄製のなにか大きいもの、あるか?」

「鉄・・・? えっと、ここにシャベルと掘ってる途中見つけたパイプはあるけど・・・」

「おっけ、それちようだい。」

雪花から鉄パイプを受け取り、電磁石ユニットにつける。

「うっそそれ電磁石なの!?! まさかそれで雪の壁を・・・」

「ああ、ぶち破る。」

「それ大丈夫なの!？」

「こればかりはやってみなくてはわからん…。」

義手＋電磁石ユニット＋ライトユニット＋鉄パイプというかなりの重量の右腕を引きずり、出口と言われた扉の向こうの雪の壁を見やる。

「んー…雪というよりかはむしろ氷といったほうがいいかもしれない…まあそこであきらめるわけにもいかないんですけど…ね！」

腕を思いつき振りかぶってパイプを雪の壁にぶつける。

結果は鈍く反響する音と金属同士が擦れた気持ちの悪い感触だけ。

おまけに腕がしびれた。

「冗談ではない…。」

「ほれほれふつーにシャベル使って掘っていけばいいでしょ…君身長高めだから上から掘ってってねー。ここまできて小規模とはいえ雪崩に巻き込まれるのはごめんだよ。」

「おう…。」

電磁石をオフにしてパイプをおろし、左手にシャベルをもって雪の壁を崩しにかかる。

「あれ、ここだけ雪が薄い…！」

が、運がいいことに上の方を一突きしただけで外が見えた。

それだけではない。

「ああー！緋月さん！メブー！緋月さんみつけたよー！」

なんと加賀城雀に発見された。

「とんとん拍子とはこのことなのか…。」

しかし加賀城雀における異常なまでの生存本能を知っていればなるほどとも思う。その生存への力は軽く予知と言っても過言ではない。

もつとも、それは本人にとって意図した予知ではないのだが…今回はそれで助かったというわけだ。

「でかしたわ、雀！」

外は雪の反射であまりにも眩しく目がくらむのだが、雀や芽吹の周

りを見ると一直線にここに来ていることがわかる。

「災害救助犬顔負けの搜索能力だねえ、これは…。」

「ええ!? メブー! 緋月さん以外にもう1人いたよー!」

「なんですって!?!」

瓢箪から駒と言うべきか棚から牡丹餅というべきか、それとも怪我の功名か。秋原雪花の発見は、調査隊にとって大きな収穫であった。「読み通りとは恐れいったわ、昇君。けど、二度とあんなことはしないように。」

「ああしなかったら3人とも巻き込まれてただろうが… それより他のメンバーは?」

「別方向であなたを探してるわ。雀がいきなりこっち方面に移動し始めるからもしかしたら、って思ったら案の定、というわけ。」

「へー、そりやすつごい。」

加賀城雀への信頼か。

楠芽吹は丸くなった。

「あ、そうだ。しずくをはじめとした全調査隊員からの伝言よ。」

「なんだ。」

「味噌汁、また作りなさい。」

今度は35人分か。やれやれ。

第7話 白のベールは剥がれて

秋原雪花の発見から一月が経った。

北海道は広大なためそろそろ四国への帰還が視野に入ってきて来る頃だ。幸い食料は雪花が備蓄していたものがあつたおかげでまだしばらくは持つが… のっぴきなならない事情のせいで俺はもう戻りたい。

「かーりーんー… かーりーんー！」

「先輩！うなされてないで起きてください！芽吹隊長が呼んでますよ！雪も溶けて来たのでそろそろ帰還のために移動するって言ってますよー！」

「… なんだ楓花か…」

「なんだってなんですかー！」

「楓花は楓花で夏凜じゃないだろ！今俺には夏凜が必要なんだよ！一月も見てなきやもうニボニウム欠乏症だ！まもなく俺は死ぬ！」

「んな直球な…」

「あちゃー、こりや重症だねー。」

「雪花さん…！？ああもうこの際雪花さんでも隊長でもしずくさんでも誰でもいいから先輩を引きずり出してください！もう私じゃ手に負えない…」

「さいですか。それじゃあここに置いてくしかないねー。ぼるくんの味噌汁、美味しかったんだけどにやー。」

「ええ!?置いてくんですか!?待ってくださいよ雪花さん！」

雪花と楓花が去っていく。おのれ、俺の扱いを一月で覚えたな…
「身体に力が入らん… ニボニウム…」

起き上がろうとするも力は出ない。

が、きっかけさえあれば人は動ける。

「きやあああああつー…！！！！」

「悲鳴…！？楓花か!?」

上着だけ来て急いで外に出る。

雪はもうほとんど溶けている。それでも太陽は眩しい。が、それどころではない。即座に楓花を見つけ、駆け寄る。

「どうした、楓花！」

「楓花ちゃん!？」

芽吹をはじめとした調査隊の面々もこぞつてやってくる。

「せんぱい……！」

「ぐおっふ…… どうした…… いや、言わんでいい……」

楓花は俺を見るなり抱きついてきた。震えている。これは恐怖か。楓花の背の向こう、雪が溶けてあらわになった地面には、人の骨と思しきものがいくつもあった。

「死屍累々の山の上に立っているということか…… 楓花、落ち着け。泣くなら泣いていい。さて…… 踏みつけるというのもいささか気が引けるな…… かと言ってそうしない選択肢もない…… 丁寧に埋めていくにしても時間が……」

どうする、ここにいられるのもそう長くはない。俺はまだ断食できるが、楓花は……

「…… 人の尊厳は最期まで守られるべきですわ。」

「弥勒さん……」

「…… 珍しくいいことを言う…… 雪花、あと何日分なら大丈夫そうかわかるか？ ついでに列車までの最短距離の方向を教えてください。」

「ちようどこの方向だよ。食料とかはフルであと3日くらいかにや。」
「じゃあ帰還船が来る日までは持つな。帰還船は待つてはくれるが運転手のためにも…… よし、埋葬作業を始めよう。芽吹、いいか？」

「ええ、けど……」

「無理なやつもいる、か…… 楓花もそうだ。休ませるのがいいと思うから…… 俺が見てるよ。」
「わかったわ。」

そこからさらに数日経った。行程の半分まで来たが皆精神的な限界がきている。その上食料もそんなにない。ジリ貧だ。

「降りれば降りるだけ骨は増える、か…… だが…… いややめよう……」

最初はできてても今は参ってる子の方が多い…。嫌だな、この空気は。」

今では作業をしているのは芽吹、雪花、俺、シズク、弥勒、雀、その他数名だけである。

「メブー、いつになったら帰れるのー!」

「目の前の骨を全部埋めてからよ、口より、手を動かさなさい!」

「とはいえ、多すぎますわ!」

「そうだねえ…。みんな最後は逃げ場がなくても逃げ出すしかなかったから…」

「…そうか…」

視界が揺らぐ。

最後になんか食ったのはいつだっけ。

シヤベルを持つ左手も震える。

「おい緋月、まさかてめえもダウンしたとか言うんじゃねえよな。」

「それは問題ない…。問題ないが…」

「その震え方…。まさか昇君、食料を口にしていないとか言わないでしようね。」

「だったらなんだ、1日でも伸ばすにはこれが手っ取り早い。そろそろなんか食べなきゃなとは思っただけだな…」

「馬鹿なの!?!…雀!」

「はいっ!」

「昇君に無理やりにもなにか食べさせなさい!そして楓花ちゃんに見張らせて!」

「おい芽吹それじゃあ!」

「私の隊で死人は出さないわ。それに昇君。1日作業を終えたあと、あなたが作った味噌汁を飲む。だんだん薄くなってたとしても、私たちはそれが楽しみなのよ。わかったら休んで料理の準備をしなさい。隊長命令よ。」

「…あ、いよ。」

流石にバレたか…。お粗末だったかな、これは…

雀に肩を支えられて歩くはいいが、油断して目を瞑ったが最後、意

識が途切れた。

第8話 狂気の正気

目が覚めるとそこはテントの中。

周りには人影がひとつ。楓花だ。

「俺は…落ちていたのか…」

「あ、先輩。起きたんですね。よかった…」

「ああ…それより楓花、その格好は？」

見ると楓花はエプロンをはじめとした諸々のキッチン装備を身につけていた。

「よくぞ聞いてくれました。これは『万が一先輩に何かあった時多分ご飯とか作るの先輩だろうから先輩ほどうまくはできなくても私が先輩のかわりに料理作っちゃうぞ装備』です！」

とまあ早口かつ自慢げに紹介された。

「とどのつまり、楓花の私物というわけか。」

「はい。それにきつとこうなるって、園子様と夏凜さんは私に言っていましたし。」

「…」

「お二人と比べたら、私は先輩といた時間は短いです。というか、書史部なんてどうして配属されたのか、なんて毎日思っていました。」

楓花は何かを作りながら、俺に背を向けたまま続ける。

「けど、不思議ですね。今私は書史部でよかったと思ってます。仕事はちよつぴり複雑で量も多いけど、私のことをちゃんと見てくれる先輩がいます。それが嬉しいんです。」

「そりゃ、こつちとしてもありがたい話だ。」

「…だから先輩、抱え込まないでください。」

「先輩は少しの所作を見ればある程度のごとはほとんどわかります。そんな先輩のそばで仕事していたら、先輩ほどじゃなくても身につきますよ。その観察力は。」

「楓花…」

「だから、きつと今ここでもしもの時用に2食分だけ忍ばせておいた

インスタントのうどんも、きっと先輩は口にしないんじゃないかな、なんて思うんです。」

「……」

楓花の持つ盆の上にはひとつのお椀。

湯気が見える。今できたということがわかる。

「あつたかいもの、どうぞです。先輩。」

「あつたかいもの、どうも。でも……今はいい……」

「やっぱりですか。」

緋月昇の根幹、そこはどうしようもなく自罰的なのであり、また結城友奈の影響か利他的なのだ。しかもタチの悪いことにこれを理性でもってやっているのだから手のつけようがない。

「あなたは……どうして……なんでそんなに……！」

楓花は問う。だが答えは出ず。

緋月昇はただ、横たわっているだけだ。

「昇さん…… ツ!!」

刹那、意を決した楓花はうどんの汁を飲む。

そして、その汁を口に含めたまま昇の唇に唇を重ねて。

「……!？」

「…… 燕の親は一度食べたものを口移しでひなに与えます。つまり、そういうことです……！」

それだけ言つて、楓花は逃げるようにテントの外へ走っていった。

「…… 大胆なことをする…… おかげで食欲がわきあがってきた

じゃないか…… すまない楓花。いただきます。」

久々に食べたうどんの味は少ししょっぱかった。

「…… こんな自分が嫌になるよ、ほんと……」

うどんをすすする音に紛れて、緋月昇の中で何かが割れるような音がしたのはまた別の話。

第9話 北の地にサヨナラを告げて

「どうか、無理やり予定通りと言ったところか…。」

緋月昇が倒れた数日後、調査隊は無事苦小牧に到着し、四国への帰還船に乗り込んでいた。数日もすれば四国に戻る。家の布団で眠れる。これは間違いなく安心をもたらした。

「ええ… 船に乗ってる分の人数の水も食料もある… 安心して帰れるけど… 貴方の義手のアンカーユニットそしてもう一個不明なユニット… 四国に戻る際に必要とは思えない…。」

「間違えて積んじゃった、とかじゃにやいの?」

「だといいいのだが… このアンカーユニット、構造が少し違う… 巻きが早い上にワイヤーが鋭利だ… まるで鞭と剣を内包してるかのように… それによくわからん方は… 直径3mmで長さ3.5cmの針が数十本… この構造だと致命傷は与えられないようになってるな… そして… おあつらえ向きに手紙がある。ユニット内部に入れたということは、漏洩をできる限り伏せたかったのだろうな… つまり、この装備を俺に差し向けた理由があるってことだ。」

手紙の封を開ける。だがさらに入念に文章は暗号化されていた。

「これ全部数字… 25114152151821112114… 一行目だけでこれだ、よほど重要な内容らしい… 解読するのも一苦労だろうな…。」

「やあのぼるくん… ですね。」

全て数字で書かれた暗号を見て苦勞しそうと、そう言った先に楓花は解読していた。

「楓花ちゃん、これ読めたの…!?!」

「はい。これはアルファベットを順に数字と対応させたものです。Aは1、Bは2というように。境目が消されていますが読めなくなるほどの弊害ではないですね… 全文を読みます。」

『やあ昇君。突然こんな暗号の紙と帰ってくるというのに武器ともとれる追加ユニットを送り付けたのには当然わけがある。単刀直入に言うと、大赦の弱体化を狙って大赦を転覆させようとする集団が大

赦本庁を包囲したからだ。彼らはかつて赤嶺と弥勒の両家が使っていた武装を探しているらしい。その情報の出処は不明だがきつと内通者を入れられたのだろう。話はそれだがその武装は現在乃木家地下の封印の間にある。運の悪いことに大赦のトップは園子様だ。連中は園子様をどうするのかはわからないが、乃木家も危ない。君が四国に着くまで園子様、そして夏凜を保護することに全力を尽くすが連中は人数も装備も不明だ。乃木家地下シェルターももしかしたら破られるかもしれない。だから我々は君に全てをかけることにした。そのユニットは武装解除に重点を置いている。すまないが、よろしく頼む。三好 春信』。以上です。」

「… どう考えても着くまであと1日かかるじゃないか…。おいマジかよ…。くそっ…。！」

現状、地獄だ。夏凜も園子も無事かわからない。なんだ、どうしてそんな集団がいる。

「先輩…。この船にはモーターボートが一隻あります。さつき確認しました。」

「楓花…。そうか。さすれば今すぐ出れば明朝には着くか…。」

「待ってください先輩！今出ても…。ろくに食べてない先輩が出たら着く頃には空腹で動けませんし何より眠気が酷くなるはず…。ダメですよ！」

「だったらなんだ…。カフェインとブドウ糖でなんとでもなる…。どうにでもしてやるよ…。」

緋月昇は楓花を見ているようで見ていない。その瞳は虚空を見つめている。

「昇君…。はあ…。何言ってもダメそうね…。」

「心がもうここにない感じかやあ…。」

「嫌だ…。行かないで昇さん…。行かないで…。！見てよ、楓花を見てよ…。ねえ…。！」

楓花は後ろから昇の服の裾を掴む。

昇は振り返らない。楓花を見ない。

果たしてここに『緋月昇』はいるのだろうか。

「ねえ… ねえってば…！」
楓花の悲痛な叫びだけが太平洋にこだましている。

第10話 それは人に在らざる

「それでも俺は行く… 駆けつけることができるのなら… 俺は夏凜と園子のところに行く…！」

『見る』『聞く』このふたつを半ば放棄している緋月昇は果たして『緋月昇』なのか。誰も見たことのないほど緋月昇は焦っている。

「聞く耳を持たないようだけど… それでも言うわ。昇君、今は待ちなさい。食べるものを食べて、眠気を覚ましてからじゃなきゃ貴方の大事な三好夏凜は救えない。それに赤嶺と弥勒の使つてた武器にも銃器があったのなら、昇君、貴方死ぬわよ。」

「それでもだ、芽吹。それでも俺はのうのうとしてるわけにはいかない。俺だけゆつくりなんてしてられるか…！」

「普通じゃない取り乱しようだね… でも、取り乱してるのはもう一人いる。」

「楓花…。」

昇の背に楓花は顔をうずめている。

華奢な腕を回して、行かせまいとしている。

「行かせてくれ楓花。俺は、俺より大事な人を助けたいんだ。しかも、助けられるのは運悪く俺だけらしい。だから…。」

「いや… 行かないで… 楓花を置いていかないで… もうひとりぼっちは嫌なの… ひとりぼっちは、嫌なの…。」

「芽吹も雪花も、ほかの調査隊メンバーもいる。お前はひとりじゃない。それに、だいたい2日くらい会えないだけだ、何も心配しなくていい。」

「楓花ちゃん…。」

楓花の取り乱しようはわからなくはない。中学3年生、誕生日も来ていないからちようどあの頃、樹海の中で戦つてた少女たちと同じくらいの年齢だ。

「陽本楓花は緋月昇の最高の後輩だ、胸を張れ。戻ったら今度は手料理のうどんを作ってくれよ、楓花。だから… 先輩として、上司として言う。俺を、夏凜と園子のところに行かせてくれ。」

「……先輩は……ほんとに、夏凜さんが好きなんですね……私の心をわかっててなお、それを貫き通しますもんね……」

「ああ……俺は無情に選ぶ。痛いさ、とても。だが俺は三ノ輪銀にはなれないし、楓花の両親にもなれやしない。俺は緋月昇だから。」

「知ってたんですか……」

「まあ、な。見てればわかった。引き取られた先で酷い目にあつたことも含みでな。」

「……ずるいですよ、ほんと……」

楓花の腕が下ろされる。昇は振り返つてただ一回、楓花の頭を撫でて貨物室に向かったのであつた。

「行つてらっしゃいます、先輩。」

日が沈みそうな時間に、一艘のモーターボートが海を駆ける。

友のところへ向かわんとする緋月昇を止めるものは今のところはいなくなつたのであつた。

出発から6時間後、ついに緋月昇は四国へ戻つてきた。だが、乃木家まではまだ距離がある。

「眠い……腹減つたな……」

と言いながらも懐に忍ばせていたカフェインのサプリとブドウ糖のサプリを飲む。効き目が出る頃には乃木家に着くだろう。そこからが勝負だ。

「太陽が昇る……さ、行くか……」

アンカーユニットを近くの建物へ射出し、振り子の要領でできるだけ早く移動する。

はたから見たら蜘蛛男のようだなと思ひながら最速で乃木家へ向かうルートをとる。

「待つてろ夏凜、園子……！」

この時から緋月昇の中の人ならざる部分が鼓動を打ち始めた。激しい怒りが引き金か。それは誰にもわからない。

第11話 夢だとしても

午前8時。

緋月昇は乃木家の屋根に張り付いていた。

「乃木家正門周辺は中途半端に防具を着た奴らが3人…だが3人だけか…仕留めることはできるが無視だな、俺の存在に気づいていない…だとするなら中に入りたいのだが…煙突もないし…玄関から行くにもリスクがある…しゃあない、窓割るしかないか…」

だが違和感がある。静かすぎるのだ。

騒乱が起きているにしては、静かすぎる。

「てことは…こいつらもう中にいるのか…！」

窓を割って中に入る。地下ならまず階段を降りればいいが見張りは当然いる。しかも窓が割れた音を聞きつけてこっちに来るはずだ。それはつまり、戦闘の開始を意味する。

「武装解除に重点、ねえ…死にそうになったら殺す気でかからなきゃ救えないっての…！」

ゆっくりこちら側に来た見張りの2人。

その手に握られたスタンガンのようなものを物陰から針でたたき落とす。

「何っ…」

「せえいー」

その後天井にアンカーをセットし再び振り子の要領で2人まとめて蹴り飛ばす。さらに念には念を入れてスタンガンを拾って見張り2人を気絶させる。

「よし…」

これをあと何回やるんだ…

だが、やるしかねえ…地下にまずは向かう…！

「最速で最短で真っ直ぐに一直線に…行くぞ…夏凜…園子！」

天井にアンカーを刺し一気に階段の見張りの後ろに降りる。速攻でスタンガンを見張りの首に押し付けて倒す。

「次…地下階段を降りた先か…トランシーバーは貰って行く

か…」

『ガー…よし、やっときさ乃木の嬢ちゃんのところにとどり着けそうだ。木刀二刀流の嬢ちゃんには手を焼かされたが…まあいい。手勢は減ったが乃木の嬢ちゃん仕留めるには十分だ。見張つとけよー、仕留める前に楽しませて貰わねえとわりに合わなそうだな…』

瞬間、緋月昇の意識は一瞬緋月昇から離れた。そして次にはどす黒い何か、灼けるように全身を駆け巡る衝動がやってくる。

「うおおあああ…ツ!!!」

アンカーを射出、できるだけ早くシエルターのある座標まで向かう。そこには気絶している数人の男と三好夏凜とシエルターの解錠を試みる集団が5人程度。5人なら…殺れる…!

その時緋月昇の周りに誰か一人でもいたら、話は変わっていたかもしれない。

「見張りを抜けてきただと…!」

「何者だ!」

見たところ奴らに銃器はない。こちらに3人向かって来るが…些細なこと。

「どけえ!」

アンカーを射出と同時に腕を動かすことでワイヤーにパルス波を伝え、狭いシエルター通路では避けられない斬撃を放つ。

「何だこの武装!」

「蛇腹剣…!?!」

斬撃の直撃で怯んだ奴の首元にスタンガンを押し付けて倒す。これを繰り返すこと3回。シエルターの方を見るとそこには気絶している夏凜を人質にとった首魁とシエルターを解錠しようとしている奴の2人がいる。

「まさか一人で我々の見張りを倒して来るとは思わなかったが…残念だったな。これ以上我々を妨害するのならこいつがどうなってもいいということだぞ?若造。」

「…まさか一人で俺の足止めをしてくるとは思わなかったが…」

ああ、全くもって残念だ。これ以上そいつにその刃物を突きつけてみる。お前、死ぬぞ。」

「ほぎけ…!?!」

一瞬、ほんの一瞬意識が俺から離れた瞬間、首魁の右肩にアンカーを突き刺す。そして。

「夏凜を人質にとったんだ… それ相応の痛みは受けて貰わねえとなあ…!」

そう言つて、パルス波によりワイヤーで右腕を切り落とす。

「ぐおおおお!!」

「ちっ… 貴様の薄汚れた血で夏凜の可愛い私服が汚れたじゃねえか!」

全力で首魁の顔面を踏みつぶす。なんなら針も首元に数本刺した。だが… これで終わりじゃない。

「シエルターが空いている…!?!」

シエルター内部へ入る。あと一人なんだ。あと一人消せば…!

「のぼるん?!」

視界の先からの声。園子だ。

まだ園子は無事だ。

「園子!」

「のぼるん後ろ! 武器庫は後ろから…!」

園子の声と同時にひきつった表情が見えた。大方、俺の後ろで銃器でも構えられているんだろう。だが、お構い無しだ。

「そうかい!」

アンカーユニットを逆転させて最後の1人の腹を貫く。予想もしない攻撃には対処ができない。よって、最後の1人は反撃もできずに倒れた。

「誰も殺さないのは無理があつた… すまない園子。遅くなつて。」
「のぼるん…!」

「でも多分まだ来る。結局、息の根を止めるまで続きそうだ… 夏凜を投げ込むから、2人でそこにいてくれ。」

シエルターの中に夏凜を投げ込む。数ヶ月ぶりの再開で、ほんとな

「ら今すぐ抱きしめたい。でも。」

「そろそろ湧いてきやがった…面倒なことだなほんと。じゃあ片付けますかね…」

「返り血と少しの傷。その姿は園子の記憶を刺激した。」

「またな。」

「…のぼるん…ッ！」

「シエルターの扉を再び閉め、緋月昇は単身で戦いに身を投じるのであった。」

第12話 魂より出ずる力

敵は約10人。さすがにしんどい。

だが、引き下がるわけにはいかない。

もう、この手は血に濡れているのだから。

「てめえらで終わりか？ 価値なき命を捨てに来たのは。面倒だから一瞬で終わらせてやるよ…。」

ぞろぞろとやってくる10人の男。

右の壁にアンカーを刺し、1番左の男に針を撃ち込んで倒す。そしてアンカーを中心とした円運動の要領で左の壁を蹴りながら男たちの背後に回る。

「散れ」

ワイヤーに男達の首にが引つかかる。それはつまり、アンカーを巻けば首が斬れるということだ。

「ぐおおお…」

「… 呆気ない、記録する価値もない。」

倒れていく敵。床に流れる鮮紅色の液体。もはや一面真っ赤であった。緋月昇の身体も返り血だらけである。それでも緋月昇に見えるそれはまだ血に飢えていた。それはまるで獲物を狩る狩人の如く。

「… おい、いねえのか。」

地下に突入する前に奪ったトランシーバーに向けて、いつもより格段に低い声で話す。

「誰か死んでねえやつはいねえのかあ!？」

この手の問いならば『生きているやつはいないのか』と聞くのが普通である。問いかけの先の存在が反応しやすいからだ。だが、先の昇の声は『死んでないやつはいないのか』と言った。それが何を意味するか。問いかけの先の存在はこれを聞いて『全滅したに等しい状態になった』あるいは『全滅し敵にトランシーバーを取られた』という2つの解釈ができる。

だから、トランシーバーからは声は聞こえない。ただ呼吸が聞こえ

るだけ。そして緋月昇のような何かにとって呼吸さえ聞こえればそれで十分だった。

「2人、園子と夏凜以外に2人か…とつとと消すか…」

ゆつくりと、さつきまで生きていたものを踏みつけていきながら昇であり、昇でないそれは進んでいく。だが数歩進んだところで歩みは止まった。そこに敵はいたのだから。

「ちようど2人…価値なき人間が2人か…」

「ひい…」

緋月昇の左目は紅く光っていた。その上そこには友奈と昇が受けたタタリの紋様が浮かんでいる。そう、この緋月昇であつて緋月昇でない部分は、緋月昇に刻み込まれていた天の神の因子であり、それが”人間への”激しい憎悪で励起したのだ。

「散れ」

それは対人戦闘において躊躇の欠片も見せない悪魔に成り下がるものである。

「……はっ」

緋月昇は乃木家突入から15分で敵を殲滅した。それには全く無駄がなく、果たして人の心があつたのかはいささか不明である。

天の神の因子の励起が収まったのは敵の全滅を確認してからだ。入念に息の根が止まっているか確認し、全員呼吸をしていないことを確認してからシエルターを開けた。

「のぼるん…」

「昇…」

そこにいたのは2人の少女。緋月昇が守りたかつた少女たちだ。
「…ただいま…武装解除なんてぬるいこと、俺にはできなかつたよ。」

それだけで言わんとすることは通じた。

返り血だらけの全身で、絞り出すような一言。ただそれだけでい

い。

三好夏凜は目を背けて。

乃木園子は目をそらさず。

2人は口を揃えて言った。

『ごめん…』

第13話 私の太陽は

陽本楓花は両親と3人家族、父は大赦の神官であり、母は書史部に所属していた。だが楓花は両親の意向で大赦に所属することはなく、普通の中学生として過ごしていた。だが、神樹の消滅と時を同じくして両親は砂と化し、楓花は天涯孤独となってしまった。幸い楓花には父方の伯父夫婦がいたためそこに引き取られたのだが、そこで仕事のストレスや神樹の消滅による混乱を原因として楓花は伯父から暴行を受けたのであった。それに耐えること数ヶ月、楓花は自らの意思で大赦へ入ることを決意した。楓花の学業成績がずば抜けているのは暴行から逃げるための口実だったがそれは意味をなさなかった。だから楓花は逃避することしか選べなかったのだ。

事情を包み隠さず話した楓花は上層部、つまりは三好春信の判断で書史部へ配属された。

「陽本楓花です、よろしくお願いします。」

「よろしく、書史部臨時部長、緋月昇だ。机そこだから好きに物置いてな。」

「え、あの部長仕事は…」

「仕事つてもんはひとつひとつコツコツやるものだ。覚えることを覚える。覚えたことをする。そしたらまた新しいことを覚える。勉強と同じだ。だがまあ楓花。仕事の前にひとつ聞かせてくれ。」

「なん、ですか…?」

「いつから、心に壁を作った?」

その一言が陽本楓花を闇からすくい上げた。陽本楓花を全て見抜いたのは緋月昇が初めてであった。そう、緋月昇との出会いは楓花にとって救いであったのだ。

「…っ!?!」

「…その反応…そうか、春信さんが言ってた通り…でも根本は想定よりも深かったというわけか…なるほど。だとするなら俺がまず楓花にすべきことは、心の壁と闇をできる限り取り払うこと、か。」

異常なまでの観察力と推察能力は楓花の心の奥底まで容赦なく突き進んでいく。普通なら拒絶される領域まで真つ直ぐに。

「部長は… どうしてそこまでわかるんですか？」

「得意だからだよ、目で見て、耳で聞くことがね。あと、部長つてのはやめてくれ。堅苦しくて嫌だつてのと俺というか勇者部にとつての部長が脳裏にチラつくからな。それに歳もひとつしか違わない、そうだろう？」

「じゃあ… 先輩、で…」

「いいね。じゃあ楓花、一番最初の仕事だ。この紙に自分の感情、心が思っていることを思いっきり書きなぐれ。誰も止めやしない。なんならあと4枚くらいあげよう。30分後に戻ってくるから一人でじっくり自分の心に向き合ってみてくれ。」

「え、一人で、ですか!?!」

「おうよ。邪魔がない方がいいだろ。書史部は一旦受付止めるから安心してくれ。今、周りに怯える必要なんてないから。」

緋月昇の一言一言は楓花の心を見透かしていて、そこに一筋の光を際限なく降り注ぎ続けていく。

「それじゃまた30分後にな。」

——これが、陽本楓花と緋月昇の一番最初の出会いであった。

その時から陽本楓花にとつて緋月昇という存在は太陽のように眩く暖かく、そして同時に触れられず届かない存在になった。

陽本楓花にとつての太陽、緋月昇。だが皮肉なことに、緋月昇は太陽、すなわち天の神由来の力を呼び起こしてしまった。

人歴2年、人の暦に顕れた人ならざる力。

それはまた繰り返される歴史の前触れか、それとも人が完全に神から離れるための最後の試練か。

第14話 十字架は俺だけで

「…なに、これ…」

陽本楓花が乃木家に着いたのは日が傾いてきた頃だ。いつもなら隣に昇がいるが今日はいない。もつといえは今日は昇のぶんの荷物も楓花が持っている。そんな楓花の目に映ったのは所々が赤黒くなっている乃木家の庭であった。

「楓花？ 楓花よね？」

「夏凜、さん…？」

「よかった、無事だったのね…。昇だけ先に帰って来てたから心配してたのよ。」

「ありがとうございます…。で、その先輩は…。今、どこにいるんですか？」

楓花の問いは夏凜の視線が下を向いたことで答えになった。楓花は昇の部下である。昇ほどではないにしろ観察眼は常人より鋭い。

「ここにはいないんですね…。園子様は無事ですか？」

「ええ…。奥で膝を抱えているわ。昇がああなったのは私のせいだつて…。違うって言っても聞かないのよ…。」

「そんな…。だったら先輩のところへ届いた文を読んだ私のせいになりますよ！」

「いいえ、楓花には感謝してるわ。昇を送り出してくれたのだから…。悔しいけど、昇が来てくれなかつたら私も園子も無事じゃすまなかつた。昇にあんなことをさせる前に私が全員ぶつ倒してたら…。！」

陽本楓花も三好夏凜も乃木園子も皆、緋月昇のあの一方的殺戮は『私のせいだ』と思っている。

そして皆、『それは違う』と他人の自責を否定する。そしてそれは、緋月昇も例外ではなかつた。

「殲滅、完了…。」

大赦本庁にて最後の敵の首を掻き切る。緋月昇の全身は返り血だらけであり、また同時に自身の血にも塗れていた。

「流石に頑張りすぎたか…。」

天の神因子の励起は収まったが、それでもまだ緋月昇の中の破壊衝動は収まっていない。

「緋月君…。」

「…春信さん、ですか… 武装解除だけには留められなかった…。」

「…いや、こちらこそすまない緋月君。君に巨大な十字架を背負わせてしまつて…。」

「…乃木家に敵が来た時からこうなることは読めてました。夏凜や園子になにかしようものなら、俺が全力でそいつを殺すだろうって。それがたまたま全員だっただけで。」

赤い液体が滴る左手を見ながら、緋月昇はただ話す。ここまで約40人。全員殺した。

「緋月君…。」

「こんな手じゃ、もう夏凜や、園子や楓花の頭を撫でることなんて出来やしない…。」

「それは違う。違ふよ緋月君。」

三好春信は首を横に振る。

「君は夏凜を、園子様を護ってくれた。その途中でこうなっただけで、君が一番大事な目的を果たしている。ただそれだけでいい。君は君だよ。それに、夏凜には君が必要だと僕は思うよ。兄である僕が言うんだ、間違いはない。」

「それでも、俺が許せない。」

「別に君がどう君自身を判断しようが勝手だ。だが、君は自分自身を見れないだろうっ。」

緋月昇の目で見る、耳で聞くというふたつの人間離れた特技。だが、それは自分自身には使えない。だから自分自身を正しく判断できない。それが緋月昇の一番の弱点である。

「っ……………」

「君は、他人に身を委ねるといふことも覚えた方がいい。何も出来なかった、大人のたわごとだけどね。」

三好春信は大人であった。

子供たちに委ねてしまったことに対して誰よりも自責を感じているのは彼なのだ。だが、緋月昇はそれを読み取れなかった。

「……他人に、か……」

だが緋月昇は三好春信の真意を悟った。

十字架は緋月昇が背負うものだ。だが背負ったのなら手は空いている。その手は何のためにあるのか。緋月昇の答えは出た。

第15話 夢でなら、夢だったなら

緋月昇が乃木家に帰ってきたのは月が高く昇る真夜中であった。もう、少女たちは起きていない。そう思っていた。

「ただいま...」

玄関に入り、靴を脱ぐ。ぶちまけた血液は掃除されていて、本来俺がやるべき事だったのにと申し訳なきが募ってくる。そんな様子でリビングに入ると、そこには青白い月明かりに映える美しい金色の髪をした寝巻き姿の美少女が立っていた。

「おかえり、のぼるん。」

夜風もあるのか園子の髪は流れていた。

ひらひらと、そよそよと。

「ただいま、園子。まさか起きてるとはね。」

「サンチョがないとぐっすり眠れないんよ。それを逆手にとっただけだね。」

「...そうか。」

「だって、のぼるんを一人にしたくなかったから... ううん。のぼるんと二人でいたかったから。」

今日は満月なのか、夜に電灯がなくても園子の姿はよく見える。言葉と姿と。視覚と聴覚。緋月昇の鋭敏な感覚をあえて刺激している。「のぼるんを見てるとね、ミノさんを思い出すんよ。性格とか全然違うのに、重なって見えるんよ。」

「.....」

緋月昇と三ノ輪銀が似ているという話は何度か聞いたことはある。そしてその話をする時、園子は決まって悲しそうな表情をして、そして同時に微笑みを浮かべている。

「でも、のぼるんはミノさんじゃない。にぼっしーも、ミノさんじゃない。」

「.....」

乃木園子が三ノ輪銀に寄せる感情は友情である。そしてその友情は永遠に続く。だが、二度と会うことはない。それが乃木園子をどこ

か少し、少しづつ壊していくのであった。

「ねえ、のぼるん。」

「なんだ、園子。」

「…まだ、のぼるんのが好きだって言ったら、どうする…?」

乃木園子が緋月昇に寄せる感情は愛情。そして三ノ輪銀の投影。両方を知ってる緋月昇は、それが本当に愛情なのかは判断できない。

それが緋月昇を狂わせる。

「駄目だよ園子…そんな目で、そんな声でそんなことを言わないでくれ…今そんな風に言われたのなら…園子を選んでしまう…やめてくれよ…」

緋月昇の精神は真つ黒というのでは生ぬるいほどの闇一色で、そこにさらにノイズが加わり、何がなんなのかわからなくなってる。

「だったら…選んでよ。にぼっしーじやなくて…私を選んでよ、のぼるん!」

「ダメだッ!」

園子を見ることができない。見たらきつと落ちてしまう。何があつたとしても受け入れてくれる底なしの沼に。そしてそこから出られなくなる。深い深い依存の沼から、二度と。

だが緋月昇は別に依存の沼に落ちることは厭わない。逆だ。緋月昇は乃木園子を依存の沼に落とすことはしたくない。落としてしまつたら、乃木園子は永遠に緋月昇からは抜け出せない。そんな状態にしてしまうことを、緋月昇は認めない。何より、緋月昇を許せなくなる。

「ダメだ園子…それ以上はダメだ…やめてくれ耐えられない!拒絶なんてしたくない…でも受け入れたのならもつと…もつとひどいことになってしまう…ダメだよ…」

緋月昇が恐れていることは『自分』の依存の強化ではなく『他人』が自分へ依存することで壊れていくこと。

「のぼるん…でももう、引き返せないよ…」
「…っ…」

目を見開き、膝をつく。

ああ、俺は…もうとつくに園子を…地獄の底に突き落ととしてしまったのか…

第16話 あなたは、あなただけは

「のぼるん…！」

膝をついた昇に駆け寄り、正面に回る園子。緋月昇は左手で顔を隠し、指と指の間から目だけ見える。その目には絶望。それしか映っていない。

「俺は…！」

もうせき止められない。

心の奥底に封じ込めてきた何かから何までが全部出てくる。有象無象で魑魅魍魎、百鬼夜行も恐れるほどの闇。もちろん物理的に闇など吹き出てはいないが、だとしても緋月昇の視界は真っ黒く染まっている。

「のぼるん…！?!ねえのぼるん！」

昇の肩をゆする園子。

緋月昇が目に見える形で狼狽することなど珍しい。それほどまでに、緋月昇は弱っている。

「どうしたの、ねえってば！」

園子の声も届かない。

緋月昇は事実を受け止める能力も桁外れだ。だが、乃木園子の精神的支柱になってしまったということは緋月昇にとって許されないことなのだ。緋月昇は、乃木園子の友人であり部下である。それ以上でもそれ以下でもない。園子を支えきることができない。たとえできたとしてもその資格はないと、そう思っている。

「……」

「のぼるん…！」

園子の目の中にも焦りがある。

何がどうしてどうなってるのかという焦りが。緋月昇の様子がおかしいという焦りが。

「ねえのぼるん、何か言つてよ、怖いよ…のぼるんがのぼるんじゃなくなつちやいそうで怖い…だからせめて、何か言つてよ…！」

緋月昇の両肩に手を乗せたまま、園子は話す。不意に、昇の左手が

顔から離れて園子の右腕に引っかかる。そしてその途端に昇は園子の腕を掴み、押し倒す。

「え、うわあ!？」

さすがの園子も唐突の出来事で驚き、また天井を見ると電飾を隠すかのように昇の顔がある。

その表情は何かを諦めたかのような、それでいてまだ何かに縋り付きたいと願っている、二律背反で矛盾だらけな、そんな表情だ。

「園子……っ」

絞り出すかのように呼んだ名前。

言葉の中に込められた内面はぐちゃぐちゃである。それが露見している。

それを感じ取れない園子ではない。

「……いいよ、のぼるん。」

園子は昇の頬に手を滑らせて、そしてそのまま抱き寄せる。昇は抵抗しない。

「のぼるんは……ずっと、ずっと抱えてたんだよね。ずっとひとり…… 私と同じだね。」

園子と同じ。その事実昇は園子の胸の中でハツとする。乃木園子もまた、たったひとりで重いものを抱えていたのだ。

「そうか、同じなのか……」

緋月昇と乃木園子は同じであった。抱えきれないものをたったひとりで抱えていた。

「そう、だからのぼるんの気持ちはわかるんよ…… あなたは、これ以上苦しまないで。」

「…… お見通しかよ、ほんと……」

「…… あなただけは、失いたくないから。」

昇を抱く腕の力が強くなる。

それだけ、乃木園子にとっての緋月昇は大切な存在なのだ。『失いたくない』というフレーズは、かつて友と死別し、友に忘れられた少女の口から出るとそれだけで重みが増す。

「…… 夏凜に殴られてもいいから、このままでもいいから……」

?園子:..」

「... もちろん。」

緋月昇の目からは涙が流れていた。

翌朝、三好夏凜は緋月昇を殴らなかつた。

ただ、こう言った。

「ほんと、つくづく危なっかしいんだから... 園子に感謝しなさい。悔しいけど、私じゃあなたの心奥深くなんて触れないわ... あんたや、園子のように辛い経験なんてしてないもの...」

「あの散華を辛くないとでも...?」

「ええ... 昇がいたもの。」

「... そうか。」

「... ともかく! あんたは色々話しなさい。私がいるし、園子もいる。なんなら友奈や東郷、風や樹、楓花もいる。あんたはひとりなんかじゃないんだから...」

「ありがとう、夏凜... 大好きだ。」

「んなあ...!?!」

につ、と緋月昇は笑う。

自嘲的ないつもの笑みではないその顔は晴れていて、内容はともあれ三好夏凜を安心させるには十分であった。

「こんの、バカ...!」

今この瞬間、少しだけ、緋月昇は二人の少女によって救われたのだった。

第17話 久々に高校へ

本庁と乃木家襲撃から数日後、大赦書史部記録課はしばらくの休暇に入った。理由は調査隊への同行がそれである。普通なら休みだと喜べるのだが… 学生でもある緋月昇と陽本楓花には関係ない。

「いいのか楓花。ここからだとお前の行ってた中学校は遠いぞ…？ それに…」

「いいんです。友達がいいますから。でも… そうですね。もし3日経っても帰ってこなかったらこの紙に書いてある住所の所まで来てください。私の家です。」

「…… それでも向き合うのか。強いな楓花は…… わかった。行ってこい。」

「いつてきます、先輩。」

昼、俺と夏凜は部室で喋る。

「それで楓花は実家に帰ったのね。」

「まあそんなとこだな。」

「そんなとこって… あんたねえ、浮かない顔してるわよ。まさか可愛い後輩に浮気でもしたとか言わないでしょうね。」

「言うかよ… ただ、楓花を親と会わせていいのか、俺はそれが不安なだけさ。」

讃州第一高校勇者部。部員6名の今年発足した部活である。設立者は風先輩で、去年までは有志の助っ人活動をよくやっていたようだ。

「はー、しかし緋月も立派に上司やってるわねー。しばらく見ないうちになんかもっと大人になってない？」

「かもしれない。」

「雑ね!? 久々なんだからちゃんとか話しなさいよ! 友奈! 次の話題!」

「えええ!? えっと… ひーくん英語教えてー!」

「自分でやれ自分で… というか夏凜と園子がいるだろ… ちゃんと毎日学校行ってるんだからさ…」

「わっしーは私とにぼっしー二人がかりじゃないと教科書すら開かないんよ、ごめんねゆーゆ、わっしーの赤点回避はわっしーのためだからね」

「なるほど… それでその東郷は？」

「東郷さんは… 英語の補習…」

「ああ… わかったよ友奈。状況が状況だしな… ついでに理科基礎科目と数学もだろ。」

「すごい、なんでわかったの!？」

「顔に出た… さてと、どうにも嫌な予感がするんだよな…」

脳裏にこびりついている楓花の物憂げな顔。その中であつた何かしらの期待。

「楓花のこと？ 親と会わせて云々言ってたわね。どういふことなのよ。」

「… 虐待。」

勇者部全員が息をのむ。

「虐待って… まさか緋月それわかっててその子を送り出したとか言わないでしようね…」

「いや、先輩。これは楓花本人の意思なんです。だから行くなどは言えない。でも… 去り際に楓花はこの紙を、楓花の家の住所を書いた紙をくれたんです。3日経つても書史部に戻ってこなかったらここに来て欲しいって。」

「助けてほしいって、ことだよね…」

「だろうなあ…」

部室全体が少し重苦しい空気になる。

そんなとき、部室の戸がガラリと音を立てて開いた。

「うひゃー、辛気臭いったらありやしないよ。ぼるくんの仕業かにや？」

「ああ、雪花、遅かったわね。」

「俺のせいにするんじゃないっての… いや俺のせいだけでも

さ…… てか、雪花もここにいたのか。まさか勇者部に？」

「まあね。知らなかったの？」

「なんせ学校来たのが3か月ぶりだからな…… って、友奈と先輩は何をそんなに驚いてる？」

「いや、なんで雪花を知ってるのかって話よ……」

「私たちも会ってまだ数日なんだよ？」

あー。それもそうか。

「まあ細かいことは気にするな。というかそろそろ昼休みが終わるぞ。東郷の補習は難航してそうだな……」

はははと笑ってたらメールの着信が来ていた。楓花からだ。

「楓花……？ って、なんだこれ…… 全く読めねえ……」

本文にはただ『縋帙s縋ア縋??√◆縋唎?縋ヲ縋上□縋輔』とだけ書かれていた。

確かこれ文字化けとかいうやつだよな…… 東郷に直してもらわない限りは読めない…… だが、なぜ楓花は文字化けのメールを送った？メールにおける文字コードは同一のはず。わざわざ文字化けさせたとか考えられない。それはつまり文字化けさせることよって送信済みメールから内容を読み取られないようにした、ともとれる。まさか。

「楓花や俺の想定の上の事態か…… 逆探知…… って東郷がいねえ…… くそ、タイミングが悪い…… なんだ、この文字化けは何を表している、何が起こっている……！」

「昇…… 何かあったの？」

「東郷を必要としてるってことはパソコン案件ってところだね。文字化けとも言ってるし…… ほれ、貸してみ。」

雪花に言われるがまま端末を貸し、数分後雪花は眉間にしわを寄せて言った。

「読めたよぼるくん。極めて単純、ひらがなだけの文字列。一か所だけ復元できなかったけどあの楓花ちゃんならこれであってる。あの文字化けの内容は、『せんぱい、たすけてください』だよ。」

背筋に悪寒が走る。今度は楓花か。

「3日どころか、6時間しか経ってねえっての…冗談きついで…」
緋月昇はまだ、休むことを許されなかった。

第18話 蓄積された痛み の渦

午後の授業を抜け出す訳にもいかず、16時を回ってついに紙に書かれた楓花の家に向かうことができた。出来たのだが…

「人氣が全くない…」

アパートの一室。その扉の向こうには生命を感じない。生活音や人の気配もなく、また電気や水道のメーターも動いていない。

「その人は引越したよ。」

「…え？」

不意に声をかけられて、また同時に事実を突きつけられる。なんでもここに住んでいた楓花の親は数日前に忽然とどこかにいったそう
だ。

「そう、ですか。ありがとうございました。」

「陽本さんだっけ？あの人達愛想悪い夕方から夜にかけてすっごいうるさいのよ。それにここだけの話、女の人の方にはいくつかアザがあつたのよ。関わるもんじゃないわ。」

「… だったらなおさら、優秀な頼れる後輩をそいつらから守らないといけない。」

「そう… 優しいのね。」

「人として当然のことです。困った人がいたら手を差し伸べる。讃州第一高校勇者部のモットーですよ。」

一礼をしてその場を去る。とんだ無駄足だったけどやるべきことは見えた。だが… だとしたら楓花は一体どこにいるんだ…？

それから2日後、楓花からの連絡はなにもなく勇者部活動も身が入らず、部室で針金を変形させる作業をすることで思考を必要最小限にしていた。

「緋月君、いつにもまして難しい顔をしているわね。ここ数日ずつと…」

「なんでも楓花ちゃん…ぼるくんの後輩からSOSが来たのに手うちあぐねてるんだよ。」

「…なるほど…」

部室には俺と東郷と雪花。三人寄れば文殊の知恵とか言うが今の状況で思いつく知恵なんて…いや待てよ。

「東郷！」

「なに!?いきなり大声出して…」

「楓花のスマホをハッキングして場所割り出すことできるか?」

「ええ…できるけど…電源が入ってなかったらどうしようもないわよ?」

「それでも頼む東郷…やってくれ。」

万に一つの可能性、スマホの電源が切れてないという可能性。最後の一手。東郷美森に全て賭ける。

「位置情報だけでいいのね?」

「ああ、わかればすぐに飛んでいく。」

「ぼるくんの場合飛んでいくは物理的だからにやあ…それで、場所わかった?」

「急かさないうで、雪花。けどこれぐらいなら、御茶の子さいさいよ。」

弾き出された座標。それは道路の上だった。つまり、楓花は車の中にある…?」

「自動車の中ね。それに場所は大橋の近くよ。ここからだとかかなり遠いわ。幸い電池残量はあるから追跡はできるけれど…」

「十分だ。ありがとう東郷。」

骨折と偽装するギプスを外し、アンカー、バレット、新造したブーストアタッチメントをつける。

「はあ…行ってくる。追跡は任せた!」

まず下駄箱に向かい、外靴に変えてから緋月昇は夕焼けの空に躍り出たのだった。

夕焼けの中を疾駆して約30分。ようやく大橋市についた。東郷から送られてきた座標はここ数分ある所から動いていない。そこが楓花の居場所だろう。もちろん破棄されてそこにあるという可能性もあるが、それを気にしてはいられない。

「目標位置直上現着。ただ3階建て小規模マンションだから上から行くのは迷惑かける可能性が高い。ちゃんと正規のルートを取るしかないな。」

マンションの中に入り込み、座標の部屋に向かう。が……存外すぐに見つかった。

203号室。決して薄くはない壁の向こうから聞こえる叫び声。この声を俺は聞き間違えるはずがない。これは陽本楓花の声だ。

「……！」

まずインターホンを鳴らす。だが反応はない。その後数回鳴らすも、やはり反応はない。冷静になればここまで聞こえる叫び声だ。インターホンが聞こえるはずもない。

「……やるしかない……」

作業の時に持っていた針金でピッキングをし、一呼吸置いて突入する。廊下と閉じた扉が視界に入るが、なによりも耳をつんざく楓花の叫び声が一番異質。

痛いという声、やめてという声、そして声にならない叫び。それはまた再び俺の中にある俺ではない何かを呼び起こすには十分だった。

何も聞こえず、何も見えない。ただひたすらに続く闇に俺は吞まれ……刹那、扉を蹴破り楓花以外の存在二人を視界に捉える。

「痛みつてもんが何か……教えてやるよ。」

俺はそう言った。

「せんぱい……？」

楓花が俺を認識した時には、またあの時と同じように紅い液体があたり一面に散らばっていた。

「悪い、楓花……遅くなった。」

3日。そんなに長くないはずなのに、楓花は見違えるほどにやつれていた。服はボロボロで半裸状態。髪もボサボサで、手入れも何も出

来ていない。アザも火傷も切り傷も擦り傷もある。

「3日です…。何も、何も遅くなんてないです…。私こそ、ごめんなさい…。先輩の忠告…。ちゃんと聞いていればよかった…」

楓花は泣き始める。痛みの涙ではない、安堵の涙だ。こんな方法、状況で楓花は安心している。

「…頑張ったな、楓花。いいよ。痛み苦しみ全部ぶちまけて泣き叫んでいい。全部受け止めてやる。全部。」

「うう…。せんぱあああいい!!」

ズタズタのボロボロで、それでも楓花は3日を、地獄のような3日を過ごした。

「強いよ…。楓花は…」

月が昇る前の夜のはじめの救出劇はこれで幕を下ろした。この事件もまた、大赦上層によってもみ消されたというのは別の話だ。

第19話 幸せの資格

緋月昇によつて保護された陽本楓花は大赦病院へ移送され、治療を受けることになった。

緋月昇は大赦本庁にて内々示を受け、乃木園子はその内々示の決定を下した。

三好夏凜だけは、そんな大赦のゴタゴタからは切り離された平和な世界にいる。

「楓花の容態はどうなの、昇。」

「俺の想定より酷かった。全身痣だらけ…。質の悪いことに服で隠されるところに集中して暴力が振るわれた痕跡がある。それに、純粹な暴力だけではなかった。楓花を助けた時楓花の服は破られていた。もつと言えば薄汚れた敷布団、ただよう異臭、何より楓花の涙の跡…。導き出される結論は到底許されるものじゃない。3日もかかっちゃまった…。俺はそれが許せない。」

「昇…。あんたまた…。」

「そう思わなきゃやってられない…。」

緋月昇の表情は憔悴の色が如実に現れている。多分眠れていないのだろう。口元にはかすかに血の跡がある。切れるほど強く唇を噛み締めていた証拠だ。

「あんたは何も悪くないのよ。」

「それは違う…。助けるのが遅かった、留めることも出来なかった。こうなるとわかっていたのに、こうなるはずがないと樂觀してしまつた他の誰でもない俺のせいなんだよ…。」

「昇…。」

その時夏凜は気づいた。

緋月昇がまた『一人』になっていることに。

「ちよつとこつち来なさい。」

昇の左腕を掴み、2人は乃木家の外に出るのであった。

「勇者だったころ、私はここでずっと鍛錬していた。覚えてるでしょ？ここは一人で何かするにはちょうどいい場所だからね。」

「… そうだな、よく夕飯ができたと呼びにきた場所だ。忘れるわけない。」

夏凜に連れられて昇は砂浜に来ていた。

太陽の光が波に反射されている。そのキラキラした光とはうってかわって、緋月昇の心は重く澱んでいる。

「そうね… ねえ、昇…」

「なんだ、夏凜。」

「… あんたは、本当に私のことが好きなの…？」

夏凜は壁のなくなった水平線を見ながらそうつぶやく。独り言のようにも聞こえる、聞かせるような声音で。

「何を言ってる…」

「… そう、即答できないのね。いつもの昇なら、即答でそうだって言うのに。」

「——ッ！」

その通りだ。何があつたとしてもそれだけは貫き通していたのに。それなのに。

「… 悪いけど、今のあんたのこと、私は嫌いよ。大っ嫌い。」

「かり…」

「どっかいけ… バカ昇！」

振り返ることなく夏凜は吐き捨てた。

どうすればいい、何を間違えた、どうしてこうなった。緋月昇はただ動転し、そしてその場から静かに去っていった。

その場に残った夏凜は、昇がいなくなったとわかった時には膝から崩れ落ちていた。

「バカなのは私よ… わかってたじゃない、昇が追い詰められてるって… なんて… なんてあんなこと言ったのよ！これじゃ… もっ

と昇を追い詰めただけじゃない…！」

夏凜の頬には涙が伝い、手は砂もろとも強く強く握られる。波は膝を少し濡らし、嗚咽はただそこにあるだけ。

「私だって、昇のこと、好きなのに…！」

その言葉もまた、波音にかき消されたのだった。

第20話 そばにいさせて

「……」

緋月昇は大赦本庁書史部記録課の自分の机に突っ伏していた。仕事はもうやった。もうやることはない。なんなら明日のぶんも楓花のぶんも終わらせた。もう、何もすることがない。帰るだけだ。帰るだけなのだ。

「どこに帰れと……どの面下げて帰れと言うんだ……くそっ……」

夏凜の表情は見えなかった。でもわかる。声音と仕草、それだけあれば事足りる。

「泣いてた……泣かせてしまった……」

その事実がさらに重くのしかかる。

「くそ……」

視界はまた闇がかった。いつもなら夏凜が払ってくれるのだけれども、今回ばかりはそうもいかない。かと言って自力でどうこうできるわけでもない。さてどうしたものか。

「おや、緋月君。」

不意に背中から声がかげられる。

「春信さん……」

「また相当参ってるようだね。そうだ、陽本君が呼んでいたよ。面会に行つてあげたらどうかね。」

「楓花が……わかりました。」

そそくさと立ち上がり、大赦病院へ向かう。

「君は少し、頼ることを覚えたらいい。一人でなんでもできるほど、君は万能じゃないのだから。」

去り際に春信さんはそう言った。

万能じゃない。そんなことはわかっている。でも……頼る、か……それは巻き込むことじゃないか……？それは避けねばなるまい。

でもそれでは結局俺は一人じゃないか。頼ることなんて出来やしない。それじゃ結局何も変わりやしない。どうすればいい。

「ははっ……」

答えは出ないまま、自嘲的な笑みだけがこぼれる。やれやれだぜ全く。

とまあ、そんなこんなで歩いていたら大赦病院の受付に着いていた。面会の申し込みをし、すぐに許可が出て示された病室に向かう。もうここに来るのは何度目だろう。園子もしばらくここにいた。

病室の扉をノックする。

中からどうぞー、という声。

「…元気がか、楓花。」

「先輩… はい、まだちよつと痛いところがありますが、心は元気そのものです。」

「そうか。何よりだよ。」

傾いた太陽の光が楓花の銀髪に当たって光っている。楓花の笑顔とも、闇がかつている視界とも相まって、直視できない。

「先輩は… そうですか。嫌われちゃいましたか。そりやそうですよ。」

「…バレたか。いや… わかるよな、楓花なら… そうだな。」

楓花の尋常ではない観察眼を持っている。

陽本楓花にとつて緋月昇は憧れの先輩であった。その憧憬が、彼女の技術を伸ばしている。

「全く… 先輩は毎度毎度全部が全部自分のせいって思うのを直してください。人っ子一人がどうこうできるキャパシティを先輩はとつくにオーバーしてるんですから吐き出さないと… それこそ私の両親のように…」

「んなことできるわけあるかよ…」

「私は、先輩だったら… 何されてもいいですよ。どれだけ傷つけられても、いいです。」

「ふざけるな！」

思わず声が荒ぶる。

こんな心を楓花にぶつけなんてしたら…！

「やっぱり怒りますよね… 多分ですけど、夏凜さんの怒ってる理由はそれと似たようなものですよ。なんでもかんでも受け止めている、

相談もしない。無理ばかりしている。勇者部六箇条でしたっけ、確か『悩んだら相談』と『無理せず自分も幸せであること』って文言があったはずです。さて先輩。守れていますか、これを。」

「残念ながら、全くだ…。」

「はあ…先輩ともあろう人が言われないと分からないなんて…これは相当参ってますね。」

「耳が痛いな…。」

「ちゃんと夏凜さんに謝るんですよ？それと、抱えてるもの、下ろせる分下ろしてください。私もこんな先輩もう金輪際見たくないですから。」

「そうだな、そうするよ…ありがとう楓花。少し楽になった。」

「それならよかったです…私の退院はまだ未定です。もうちよつと待っていてください。」

「ああ、わかった。またな、楓花。」

会話を終え、緋月昇は病室から出る。

その表情は少し晴れていた。

「ただいま。」

「おかえり、のぼるん。」

「…夏凜は？」

「にぼつしーは自分の部屋にいるよ〜」

「そうか。園子…ちよつと夕飯遅くなるけどいいか？」

「そっか、今日のはのぼるんの担当か…いいよ、のぼるん。」

「ありがとう。ちよつと待っていてくれ。」

乃木家に帰って、園子と話して、そして夏凜の部屋に向かう。不思議だ、歩いているだけなのに全身の感覚は鋭く鋭敏になっている。いつもと同じ速度で歩いているはずなのに、気持ちゆっくりと視界が動いている。

「ふう…。」

閉ざされた部屋の扉をノックする。

「はいはい… ってのぼっ…!？」

出てきた夏凜を抱きしめる。

「ごめん、夏凜… でもありがとう…」

昇… 私こそごめん… あんなこと言って… 本当にごめんなさい…

「いいんだ… もういい… でも、これだけは言わせてくれ。」

「… 何よ。」

「愛してる。」

「… ほんと、そういうところよ。」

「残念ながら緋月昇つてのはこういう男なのさ。わかってたくせに。」

「… ええ、そうだったわね。」

夏凜は少し離れて俺を見る。

「昇。」

「… なんだ、夏凜。」

「その… 愛してる、わ… 私も…」

「ふふっ… はははっ…」

「んなっ!? 笑うな!」

「笑うって… あーもう可愛いなあ!」

「ちよ!? またいきなり抱きつくな離しなさい! 二回目はいらないわよ!」

「一回目は欲しかったんだな? かー、可愛いやつめ! おまけに素直じゃないとききた!」

「そんなこと言ってないわよ! いいから離せバカ昇!」

「離すかよ! ずっとそばにいるさ。」

「——ッ!？」

ようやく夏凜は真っ赤になった。

そろそろ効かなくなってきたなこれ。

「のーぼーるー…!」

「わかったわかった。それじゃご飯作ってくるよ。今日はそうだな… うどんにするか。」

「っ…はあ、そうね。何か手伝う？」
「いいよ、ゆっくり待っててくれ。その代わり、とってもおいしいの作るから。」

その日の乃木家の食卓は、個人の好みの太さや弾力に合わせた麺と味付けをしたうどんが並んだという。

同時に、今まで滅多に見ることのなかった年相応とも言える緋月昇の屈託ない笑顔もそこにあっただのだ。

『ちそうさまでした〜』

「はい、お粗末さまでした。」

乃木さんちの今日のごはん

第1話 緋月昇のこだわりラーメン

緋月昇。表向きは大赦書史部記録課課長、内々示によってもう一つの役職ができているが、それが緋月昇の裏の顔である。だが、今回から紡がれる彼の物語はそれとは全く関係がない。

——始まりは、彼の携帯に舞い込んできた一本の電話からだった。

7月中旬、陽本楓花も退院し、書史部の仕事が多いことを除けば彼らは非常にゆったりとした日々を過ごしていた。

「暑いですねー、先輩…。」

「そうだな…でもここは年中温度と湿度が管理されている書史部。エアコンの風が寒いということ以外はまったくもって快適だろうて。」

「寒いんですか!?あの雪国だと全く動じてなかった先輩が!？」

「自然の寒さと人工的な寒さってのは違うんだよ…まあいい。そのために薄手のパーカーがあるしな。」

「だから先輩長袖なんです…私なんてまず来たら着替えますもん。」

「大変なんだな、楓花も…。」

「汗は女の子の大敵ですから。覗かれる心配がない以上そつちをケアしますよ。」

「言いきつちやうのか…いやまあそうだけど先輩としてそこは不安…っと、電話だ。珍しいな、芽吹からだ。もしもし?。」

『もしもし昇君?ちよつといいかしら。』

『どうした芽吹。珍しいな。』

『いきなりで悪いのだけど、しずくがラーメン発作を起こしたわ。』

「…は?。」

『そうね、私もそんな反応をしたわ。けど事態は深刻で、徳島ラーメンじゃないと受け付けないらしくって…。今から徳島に行くより昇君に作ってもらう方が早いと思って。』

「おいおい芽吹… 本庁からゴールドタワーはそこそこ時間かかるぞ…。まあでもそうか。確か雪花もそこにいるよな？」

『ええ…。引越しが面倒だからってずっとここにいるけど…。それがどうかしたの？』

「いや、聞いたただけだ。食材のリストを送る。後で交通費往復二人分請求するからな。」

『交通費…。そうね、わかったわ。』

電話を切る。やれやれ参った。

ラーメンか…。麵から作るから小麦粉と、スープは味噌ベースに魚介系の味を足して…。でも熟成の時間はないから…。昆布と鰹で代用効かせるか…。野菜はネギと人参ともやしとキャベツ。海苔とチャーシューは買ってきてもらって…。よし、だいたい見えてきたな。

「これでよし。」

必要な食材のリストを芽吹に送り、ゴールドタワーへ向かう準備を整える。

「楓花、仕事は終えたか。」

「えっと、今日割り振られたぶんの8割は。」

「おっけ。それなら明日俺が持つからちよつと付き合ってくれ。今からゴールドタワーに行く。」

「え…。ってここからだとして少し距離ありません？ちよつとお財布が…」

「安心しろ、芽吹から二人分徴収するさ。行きの分は俺が出すし安心しろ。その代わり…。向こうで色々手伝って貰うからそこら辺だけよろしく。んじゃ行くぞー」

「…はいー」

「とういうわけで特急フル活用でやってきたぞ、で… リストは揃えてくれたか?」

「ええ、それで昇君…」

「わかってている。残念ながら二人分だけだ。多分雪花も発症してるだろ、ラーメン発作。」

「しずくほど重篤ではないけどね。」

「おっけ… 2時間くれ。0から作る。楓花は米といで炊飯、ネギと人参の千切りとキャベツを適当な大きさに切ってくれ。怪我するなよ。」

「… はい!」

「昇君、それぐらいなら私も…」

「楓花にやらせることに意味がある… あの子はああ見えて傷だらけなんだ。目を離したくない。それに、芽吹にはもしもの時に備えて追加で買ってきてもらう可能性があるからな、そっちを任せたいんだよ、隊長。」

「はあ、わかったわ。雀!」

「は、はい! 何用ですか?!」

「弥勒さんとその他数人連れてスーパー近くに待機してて。何かあったら連絡するわ。」

「ええー、めんどくさいよー」

「つべこべ言わない。シズクが暴れてもいいの?」

「すぐ行きます。」

全く見事に掌握しておる… さてこっちもそろそろ…

「んじややるか。割と時間との戦いだけど焦るなよ。」

「はい。包丁とかはここにありませんね。」

「だな。よし、お料理の時間だ。」

緋月昇と陽本楓花が調理を開始して二時間、特に問題もなく無事に

ラーメンは完成した。したのだが、ここからが緋月昇の本領だ。

「楓花は米をついでくれ。こっちはしずく用と雪花用の味付けをしておくから。」

「ラーメンに米って… 正気ですか？」

「しずく用だ、徳島ラーメンというものは往々にして米とともに食べるものなのさ。で、雪花用の味付けならスープにさらにラードを垂らすのさ。」

「今度はこつてりですね… そんなことしていいんですか？」

「北海道に行った時回収した文献にはそう書いてあったのさ。それを信じるだけだよ。できた。あとは野菜を乗つけて… 完成だ。」

「すごい…」

「よし先しずく用のお盆に茶碗乗つけて持ってってー。はい次雪花用ー、間違えるなよー」

完成したラーメンをカウンターから出す。

さて、こちらとしても腹が減ったな… 米は余ってるしまかないみたいなのかでも作るか。野菜も味噌もあるもんだし。

「んじやもう一品いきますか。」

「先輩？まだ作るんですか？」

「おう、ちよつと待ってろ…」

フライパンに水を通した米と卵、味噌と刻んだネギ、人参、キャベツ、そしてもやしを入れて炒める。そうチャーハンだ。

「手伝ってくれてありがとな、楓花。」

二つの皿に少なめではあるがチャーハンを盛りつける。

「先輩のごはん… いただきますっ！」

「おいおい、はやるなよ。しずくと雪花のどこいくぞ、食事は人数が多いほうがいいってもんだ。」

「はいっ！」

自分たち用のお盆を持ってしずくと雪花のいるテーブルに向かう。

「おいしい… これ、徳島ラーメンの味がする…」

「多分これスープは同じだよね… でも旭川の味がする… ぼるくんこれホントにぼるくんが作ったの？」

「まあな。文献の記憶を頼りにしている感じだけでも。」

「それでここまでの再現度… 恐ろしい子…」

「そりやどうも。」

「うめえよ緋月！しずくも俺も久々に満足したぜ！…… すごく、おいしい。」

「急いだかいありましたね、先輩。」

「そうだな。ああ、ほんとにそのとおりだ。」

はじめ一人で過ごすことになったから独学で料理を覚えた。それが今や他人にふるまう側になるとはね。思えば初めて自分以外のために作ったのは夏凜が初めてだったな。それも一年前なのか… 月日の経つのは早いものだ。

「先輩…？」

「ああ、少し物思いにふけていたよ… うれしいな、おいしいって言うってもらえるのは。」

「そうですね。」

「あとは片付けさえ終われば撤収だ。とんだ行軍だった。で、芽吹、交
通費だが。」

「ええ、雀と弥勒さんに帰りの切符と特急券を買わせているわ。現地で受け取って。行きの分は今渡すわ。最後に… 片付けはもうすでに亜耶ちゃんがやってるわ。」

「まじかよ早いな。んじゃ任せるよ。ついでにこの皿も任せていいんだよな？」

「ええ。片付けや掃除に関して、亜耶ちゃんの右に出るものはいないわ。」

「なら安心だ。ごちそうさま。」

「ごちそうさまでした、先輩。」

『ごちそうさまでした。』

「おそまつさま。んじゃ… 俺は帰って夏凜と園子と楓花の分を作る
としますかね。」

「もう帰るの？」

「名残惜しいが今から帰らないと特急に間に合わないのですね。楓花、

行くぞ。」

「はい。荷物は… あ、手ぶらでしたね。」

芽吹から封筒を受け取りゴールドタワーのエレベーターのボタンを押す。

「緋月。」

「んにゃ、どうしたしずく。」

「また、作ってくれる?」

「… そうだな、また呼ばれたらな。」

「じゃあ、待ってる。」

「… そうかい。」

それだけ言って、緋月昇と陽本楓花はゴールドタワーを去った。

余談だが、その日の乃木家の夕飯は焼き魚を主食にした和食だったそう。

1. 5部 緋月昇の原点へ 第1話 大赦公安部

緋月昇。大赦書史部記録課課長。

齢15にして長とつく職についているのはひとえに大赦の人員が急激に減少したから…。ではなく純粹に大赦にいる年数が長いからである。それに書史部記録課は人員二人にして仕事量は決して少なくはない。各部署から送られてくる各種書類の確認、整理、記録が現在の仕事だが、必ず定時にはすべて終わらせるといふ伝説が大赦内でもまことしやかにささやかれている。その圧倒的なまでの仕事能力を欲しがる部署は多いが、書史部記録課はこの二人が一番回るのだ、と重鎮三好春信は言うのであった。

そんなある日、内々示が内示となり緋月昇は別部署との掛け持ちが決定した。今日この日はその部署へ向かう日である。

「もしもし楓花？ああ、勇者部はどうだ？」

『どう、と言われると…。凄いとしか言いようがないですね。特に樹ちゃん…。部長としてすごい確に指示を出すのに、細かいところは自分たちで考えさせるんです。それに自分は歌手養成講座のほうで忙しいはずなのに欠かさず部活には参加して…。』

「まあ二年も部長やってれば貫禄がつくか…。しかしその話を聞いていると姉そっくりなこと。姉妹は似るのか…。ってそうじゃない。楓花、夕飯の支度頼む。今日は帰れるかも怪しいから…。夏凜と園子と3人…。頼まれてくれるか？」

『ええ!?!私ですか!?!』

「夏凜にも園子にも頼めないっての…。それに楓花ならできるさ。」

『…。わかりました、頑張ります!』

「その意気だ。樹によろしく、んじゃ。」

通話を切り、俺は大赦本庁の地下一階に向かう。

大赦には公になってない部署がいくつもある。俺が今向かっていく公安部も一般の人間は知らないし、なんなら楓花も知らない。大赦

職員の中でもその存在を知るのはごく一握りなのだ。

そんな公安部へ、緋月昇は向かっている。それが大赦から出た内示である。

「ここか…」

公安部なんて札はない。ただの倉庫の扉。

その倉庫の中に入り、奥に隠された扉をノックして、開ける。

「失礼します。」

「お、迷わず来たみたいだね。やーやー昇くん。噂はかねがね、この奥地公安部にも轟いているよ。書史部の人間電脳さん。」

「そういう貴方は公安部の悪魔なんて呼ばれてるようですね。そんな悪魔が…人間電脳になんの用立てですか？」

「ふふ、いいね。いい目だよ。でもまあかけてよ。話はそれから。」
「ではお言葉に甘えて。」

公安部にいたのは女性が一人。春信さんより少し年上に見えるが…それを考えるのは野暮だ。まずは椅子に座ることを…

「あの」

「ん、どうしたんだい昇くん。座らないのかい？」

「いや、なんでブーブークッションなんて仕掛けてるんですか…もつと言うなら椅子引いたらトリモチに捕まるようにしてますね…？」

「うっひゃー、見抜いちやうのか、感心感心。」

「しきりに椅子を見てたでしょう？ミスリードも疑いましたが…やっぱり。で…それを読まれる読みでトリモチを置いている。配置は座ろうと椅子を引いて座るであろう位置に…まさかそれだけじゃない？」

「うおう、なんでわかるんだい？」

「目で見て耳で聞く…それだけやってればわかりますよ…おそろくそのペンが電気ショックのビリビリのやつですね…」

「うっひゃー…お見事、私の負けだよ。それじゃあ本題に行こうか。」

そう言って目の前の女性は声音を変える。

「私の名前は桐生忍。改めて…公安の悪魔とは私のことだよ。」

「では私も改めて。緋月昇です。」

「うん、知ってるよ。君の先祖のことも…書史部にはない記録がここにはある。もちろん外には出しちゃダメだよ？話したら聞いた人間ごと君を消さなきゃいけないからね。」

「怖いことを言いますね…」

とは言ったが…その言葉に込められた殺気は痛いほど感じた。これが公安の悪魔…

「とはいえ…書史部の君を呼んだのは他でもない。この公安部にしかない資料を読み解いて貰いたいというのもあるし…春信君が君を推したってのものもあるし…純粹に君の力が欲しいってのものもある。」

「なるほど…」

「まあゆっくりしていいよ。詳しい仕事の話は次回だ。それじゃあ園子ちゃんによろしくー」

「はあ、わかりました。」

予想より早く公安部での仕事は終わった。書史部に戻るもいいが不可解な点がいくつかある。その最たる例が公安部にしかない資料…果たしてなんなのか、どこにあるのか。まあそのうちわかるだろう…

「桐生忍、か。」

桐生…確か赤嶺、弥勒とともに行動していたというが…調べてみるか。向こうもこちらの先祖の話をしていた。

「忙しくなりそうだ。」

書史部へ戻る道を歩きながら、緋月昇は今日の夕飯を考え…今日は自分が作らない日にしたんだったと思いついたのであった。

第2話 依頼と仕事と家事と仕事

公安部への挨拶が終わった翌日、風先輩からの招集に応じて讃州第一高校勇者部部室に赴くことになった。

「土曜日だからって朝早くに招集しすぎでは？」

「昇の睡眠不足なんていつものことじゃない。ほつときなさい。」

「辛辣だな…慣れたものだが。」

「まああのぼるん、お仕事すつごい頑張ってるからね、でもものぶのぶのいたずらを見抜いたって話はさすがに驚いたんよ。」

「あの人あれ平常運転なの…？っていうかあだ名付ける仲なのか…。」

「はいはい緋月、大赦の話は後回しよ。」

「なんなら後回しどころか家でやってほしいにや。」

「へいへい…で、本題は？」

重い身体はまあなんとかなるとして内容である。朝7時に校舎の一角で会議をしているなんてな…大赦の中の会議より幾分かはましだが…

「ズバリ！勇者部の親睦をさらに深めようの会よ！」

「わー！」

「…それで、具体的内容はなんですか？」

「それはね…実はまだ何も決めてない！」

「おい！」

「…帰っていいですかね、眠いし頭痛いし生活リズム狂うし…なんなら洗濯干したり皿洗ったり掃除機かけたりがまだなんですけど。」

まさか依頼ではないとは。だったらもうここにいる理由はない。

「のぼるんは働き者だねくでも大丈夫だよ。」

「とはいえど、睡眠は代替できないから…帰る。」

「ちよ、緋月！待ちなさい！」

「待てと言われて待つほど、今の俺に余裕はないのです。諦めてください。」

そう言つて部室のドアを開けるとそこには一人の少女。制服から見ても同じ学校の生徒か。

「あ、あの…」

「…どうぞ中へ。お話があるのでしょう?」

「は、はい:~!」

少女は吸い込まれるように部室に入り、勇者部はもう既に依頼を聞く準備を整えていた。早いよ全く。しかし、帰れなくなったな…

「それで…匿名での依頼で、内容はこの写真の人を探して欲しい、と。」

「はい、私のお父さんです。ちよつと前に出かけるつて言つてから、ずっと帰つてこなくて…」

「警察には聞いたの?」

「警察は…!大赦の警察は信用できません…お父さんがいつつも、大赦だけは信用するなつて…」

「一理どころか百理あるな…」

「いやあんたがそれ言う?」

「わかつたわ。東郷と雪花はインターネットとかから調べてみて。私たちは聞き込みに行くわよ。」

『了解!』

かくして、勇者部の人探しが始まつたわけであつた。しかしあの男…どこかで見たような…

「…どうにも引つかかる。」

「ん?どしたのひーくん。」

「また考え事?」

俺は現在先の生徒が住んでいるという丸亀城周辺を歩いている。

だが……いくつもいくつも気になることがある。

「……匿名なのに父親探し、おかしいとは思わないか？探すためにも情報が無さすぎる。インターネットの方向で探すのはどう考えでも無謀だ……。考えすぎだと思うが、もしも、もしも俺の考えが最悪の方向で正しかった場合……友奈、東郷に電話だ、依頼主を勇者部部室から出すな！」

「え……？」

「早くしろ！」

「は、はい！」

友奈に指示を出し、俺は仕事用携帯で忍さんに電話する。この一抹の不安が拭いきれない悪寒になる前に……！

「ちよ、緋月一体全体何をする気!？」

「それはあの依頼主に言つてください、もしもし忍さん？」

『おー、どうしたんだい昇くん。血相抱えて。』

「例の襲撃者の顔写真と名前のデータ、公安部にありますね？」

『あー、あるある。ふむ。おおかた行方不明扱いになってるから探して欲しいと言われちゃった?』

「ビンゴです。40代後半、銀髪、少なくとも一人讃州一高の娘がいる、絞れますか！」

『ジャスト一人だね、雨宮 亮太郎……娘の名前は雨宮 瑠菜だよ』

「ありがとうございます！」

電話を切り、即座に夏凜にかける。友奈からの報告も聞く。

「えつと、忘れ物したから家に帰るって……」

「嘘だな、俺はそう思う。もしも夏凜?依頼主そこにいいいるか？」

『昇……ええ、いるわよ。なんでわかったの?』

「勘だ。変わってくれるか？」

『ちよつと待つて……変わっててさ……もしも変わりました』

最悪想定は無くなったか。

「雨宮瑠菜さん……ですね」

『……!?なんで、わかったんですか……』

声音が違う。動揺だ。

「見つかりました。お父さん。」

第3話 終わらぬ戦い

「……本当に見つかつたんですか？」

依頼主、雨宮瑠菜の声はあからさまに動揺している。見つかるはずなんてないと。嘘だとわかつてこう言っている。

「嘘を言う理由がないですよ。今から言う場所に来てください。」

「いいえ嘘です。見つかるわけがないんですから。それに……」

「それに……おおかた今目的を達成しようとしているのにみすみすそのチャンスを逃してたまるか、と言ったところかな。」

「ツ……！あなた、どこまでわかつて……」

「さて、どこまででしょう。残念ながら、嘘つきには教えられませんね。」

夏凜の場所はわかつた。おそらく園子もそこにいる。

「ツ……！！」

「切つたか……もう遅いんだけどなあ。」

「ちよ、緋月、アンタなんで見つかつてないのにそんなこと……！！」

「向こうも嘘だつてわかつてます。わかつてこの依頼をふっかけてきたということですよ。つまり、目的は別にある……その目的は、大赦のトップである乃木園子の暗殺……さすがにそこまでやるかはわからないですが、彼女の父親は大赦を襲撃した武装組織の一員だった。辻褄は合う……」

骨折偽装のギプスを外し、義手のアンカーユニットを装備する。

「ちよつと行つてきます。」

「ちよつとつて、そんな距離じゃないでしょ!？」

「そんな遠くないですよ。部屋に戻つといてください。それじゃ!」

アンカーを出し、空中を駆ける。電話の時に聞こえた周りの生活音から察するに、あつちか。最速10分。間に合つてくれよ……

「……どうしたの？昇の奴が変な事言つた？」

「……はい。」

「……悪いわね。あいつはあまりにも物事を察する能力が高くって、知られたくないこととかも平気で言わずけと言ってくるもんだからたまったものじゃないわよ。まあ、その人間離れしたその力で何回も助けられたのは事実だけど……」

緋月昇が電話を切った直後、依頼主雨宮瑠菜と三好夏凜は丸亀城公園でやりとりしていた。乃木園子は公開されている丸亀城天守閣から周りを見て探してみるということでここにはいない。

「名前、言っていないのに……なんでわかつたんでしょう。見せたのはお父さんの写真だけ……それこそ、大赦じゃない限りはわかるはずない……!」

神樹様が去ったこの時代、大赦はただの行政機関として存在している。確かに行政なら名前もわかるけど……

「匿名って言うてるのになんで調べちゃうのよ……あいつは大赦のそこそこ重要な職に就いてるわ。職権乱用じゃない、あとできつーくお仕置きしておくわ。その、本当に申し訳ないわ。」

「いえ……読みが甘かったこつちの落ち度です。……園子さんのほうに行ってくださいね。」

「わかつたわ、こつちはまだ探しておくけど……」

「もう、大丈夫です。」

「え?大丈夫ってどういうこと!?!」

駆け足で依頼主は去っていく。どういうこと……?というか、昇が大赦って聞いた瞬間、表情が変わったような……

「昇じゃないけど……何かひっかかるわね。」

「……それは当たっているぞ。夏凜。」

「昇っ!?!」

ちよつと考え始めたらさつきまで友奈と風のところにいたはずの昇がもうここにいた。義手を使っているってことは……緊急事態ね。

「依頼主は?」

「え?園子の所に行ったわ。天守閣よ。」

「了解。すぐ行く。」

「ちよ、待ちなさい昇！いったいなんであの子の名前を知ってるのよ！」

「あとで答える！」

「っ……血相抱えてたわね……何が起きてるの……？」

「乃木、園子さん。」

「ん？どうしたの？」

「気取られてるから早く済ませなきゃ。邪魔が入る前に早く……！」

「息が上がってるよ？階段を急いで上がってきたのかなあ？」

「そんなところ、です。」

「誰かが来るような足音は聞こえない、今しかない……！」

「……ひとつ、いいですか。」

「いいよ、なにかなく？」

「彼女は目を見開く。私が持つ包丁に気づいて。」

「大赦は、もういらぬ……！」

「っ……！」

真っ直ぐぶつかると進んで、手ごたえを感じる。手に生ぬるい液体の感覚もする。

「……間に合ったか……」

「の、ぼ、るん？」

でも、私が刺したのは乃木園子じゃなかった。どこからともなくやってきた男の脇腹。

「せえええやあああッ！」

違うとわかった瞬間と急な衝撃で意識が飛んだのは同じタイミングだった。

乃木園子暗殺計画は未遂で済まされた。公安部の仕事としてはい

い方だろう。園子を危険にさらしたという時点ではマイナス評価だが……

「園子、大丈夫か？」

「私は、だいじょうぶ、でものぼるんが……！」

「救急車を呼んでくれ、俺はもう立つてるので精いっぱいだ、でも急所は幸い外れてるな、てことは……！」

「しゃべらないで横になって！今呼んだから！」

「そうか、なら……ぐうっ……！」

刺さった包丁を抜き、倒れる。

「圧迫止血、頼む……！」

「う、うん！だから、だから、お願いだから、のぼるん！死なないで！」

朦朧とする意識、涙でぐしゃぐしゃな園子の顔。おいおいそんな顔するなよ。やめてくれよ……遠くからサイレンが聞こえてきた。でも、近づいているはずなのに、音が、遠いなあ……

「のぼるん？ねえ、のぼるん！のぼるん！」

「何よ、これ……！」

その日、緋月昇は……

第4話 緋月昇以外の憂鬱

「報告と……状況を確認します。現在は先輩はICUでの治療中。急所は外れていますが出血量が多く予断を許さぬ状況です。また、園子様を襲って先輩を大怪我させた女は大赦警察によって確保済み。現場となった丸亀城は清掃と破損確認のためしばらくは公開をとりやめとなっております。園子様と夏凜さんは病院で先輩のそばにいます。以上、報告終わります。」

ふう、と一息つく。樹ちゃんの家で勇者部の先輩方に向けての報告だから緊張もする。休みだからつてのんびり買い物をしていたらこんなことになるなんて……先輩、大丈夫ですよ……

「そう、ありがとうございます。楓花。緋月の所に行ってきたいいわよ。」

「……ありがとうございます、風先輩。ですが、それはもう少し後です。先輩はちよつと前に大赦を崩壊させようとした武装組織から園子様や大赦本庁を守るために戦っていました。今回はその名残と考えられます。だから、調べないといけません。今の世界で、どうしてそんな組織がいるのか……」

先輩なら絶対そうする。納得がいくまで書史部のすべての記録を読み漁る。食事も水分補給もせずただひたすらに読み続ける。

「……だめよ。休みなさい。」

「なんで止めるんですか!」

「楓花ちゃん、その、言いくいんだけど……」

「緋月君の、真似してはいけない部分まであなたはまねようとしているわ。」

「っ……………」

「いちばんぼるくんを見てる楓花ちゃんなら、その危なさもわかってるんじゃないっ!」

「そう、ですけど……」

確かに先輩が書架で倒れていることが何回かあった。自分のことに全く興味を示さないというか、必要性を感じていないように見える挙動はあまりにも危なっかしい。

「そんな先輩だから、こんなことになっちゃってるんじゃないですか……」

「ひーくんは、そういう人だから……」

「……はあ、私も病院に行つてきます。文句の一つや二つ言わないと割に合いません。」

「そうね、行つてきなさい。緋月によく言つておいて。」

「はい。」

先輩風に言うなら……やれやれ、かな。本当に、やれやれです。

それから46時間が経過した。

「つ……」

見知らぬ……いや、ちよくちよく見た天井だ。ここは大赦の病院……ということしかわからない。何があつたんだっけか……園子を蹴飛ばして、刺されたのか……確実に園子は無事だし、今こうして思考できているということは俺もしぶとく生きているというわけだが……周りの機材とかを鑑みるに、集中治療室か？

「今は、いつだ……？」

という懸念をよそに、脳波の観測がなされたからか病院の先生たちがやつてきて容態を確かめに来たのであつた。聞かれたのは意識がはっきりしているかどうか、記憶の継続性があるかどうかなど。次に来たのは忍さんだった。

「お手柄だよ昇くん。身を挺して園子様を護り残党も捕まえた。公安部としてはもう手放して喜ぶたいくらいかな。君の治療費以外は。」

「そんな話は退院後にでもしてください。本題は別にあるでしょう。」

「まあねん。病床の若者に聞きたいことがあるのさ。いったいどうやって、彼女は君たちに接触してきたんだい？」

「勇者部の依頼人として、ですな。」

「なるほどねえ、となるとその勇者部というのは今後またいろいろと厄介ごとと巻き込まれるかもしれないね。」

「年端もいかぬ少女たちを勇者として祀り上げ、理論上半永久的に戦わせていた我々大赦の人間が、今更それを言うんですか。」

「樹海の中での戦い、確かにそれ以上の厄介ことはないねえ、見てきた記録者の言葉は重い。」

「……寝ます。まだ起き上がれないんでしょう？俺は。」

「そうだね。お医者さんいわく、しばらく車いすだ。運動能力に支障はないにしろ、体内の傷が完全にふさがるままでは……本当に、しばらく車いすだね。」

「公安部本部は思いつきり車いすで行ける場所じゃないですよね、そういうえば……」

「そうとも。まあしばらくは園子ちゃんをはじめとしてみんなに甘えるといい。春信くんも言ったと思うけど、君は自分のことを全く見れていない。それで周りが傷つくかもしれないということを、もう少し考えてみたらいいんじゃないかな。」

「はあ、そう、ですか。」

「こりや重症だ。ふふつ、でも君はそれぐらいがちょうどよさそうだ。神は二物を与えないのだから。」

ふらふらと場を去る忍さんであった。やれやれ。一体何なんだ。

「自分の事、ねえ。」

興味のかけらも存在しない。しないのだが……だったらどうして今俺はここにいる？どうして生きている？自分を見ないでどうして生きてこられた？それは、人のおかげだろう。俺は人を見て、声を聞いて、考えていることを読み取ったりしてきた。それで、自分で考えてきて……

「結局帰着するのは他人だ。人間は他人がいなきや生きていくことなんてできない……」

思考はループに入った。寝よう。まだ腹は痛い。

「またあるのだろうか、こんなことが……」

ふと、脳裏によぎったこの考えは、嫌に脳裏にこびりついて離れそうにもなかった。おかげで全く眠れなかったというのが、今回のオチである。

第5話 車いす紀行、日常編

緋月昇が退院したのは想定より遅く、2か月後であった。もう夏か、暑いつたらありやしない。

「しかし、まだあの激突の後遺症があるとはね……」

まだ壁があつたころ、壁外の調査をしている時に負った傷。後頭部を強く打ち付けたことにより身体にそこその制限がかけられた。激しい運動をするためまいや頭痛がするのはそれだ。度々それを無視していろいろやってたから……そのツケがまわってきたらしい。四六時中頭が痛い。

「……迎えにきたわよ、昇。」

「……夏凜か。待たせた。」

看護師さんは離れ、夏凜が車いすのハンドルを持つ。

「友奈に車いすの動かし方でも教えてもらいたいわね。」

「名案だな。東郷とは体重も重心も違うがコツは同じだろうし。」

「忘れてないといいけれど。」

「……だな。なあ、夏凜。」

「何よ、昇。」

「この2か月、何があつた？」

「……そうね。何も無いわけではないけれど、そんなにたいそうなことは起きていないわ。」

「そうか。」

安心した。それならばしばらくは表に出るような騒乱はないだろう。

「……あ、ひとつあつたわ。」

「マジ？」

「……まあ、大事ではないわよ、多分。昇が無茶するほどのものではないわね。」

「気になる言い方だな。声音も驚愕、呆れとか、そんなものを感じる。」

「……あんたほんと、怖いわね。」

「酷いなあ。」

なんて会話をしながら、乃木家に帰ってくる。ここも二か月ぶり

どうやら俺の退院祝いを準備していたようだが、俺自身がボロボロになったことで主役不在で開催。俺はソファーに横たわりながら、心配と呆れとろんな表情がある勇者部面々を眺める。すげえ頭が痛い。それがそれはそれ。

「それが条件は全部クリアしているわ。楓花はまだ14だし、本人は望んでる。当の養護は昇が大赦で一年以上面倒を見てたでしょ？」

「言われてみれば全部クリアされてる……そして手続きは当然春信さんが受理したわけか……あの人まじでなんでもできすぎでしょ……」

現在は一学期の終わり。七月下旬。まだ楓花は14だ。

「兄貴はほんと、いろいろできすぎるから……」

「大人であって自己管理もしっかりしてお兄ちゃん先輩よりできることが多いですし。」

「完全上位互換と言っても過言ではないなあ……って、園子がないぞ?」

楓花の属性過多に突っ込むほどの気力はない、が。不自然に園子がないのはおかしい。仮にも家主だぞ。いやまあ、あの子ならいざ俺が帰ってきたとなればといったところか。

「寝たわよ。」

「ああそう寝たのね。了解。」

「……冗談よ。」

「まじい?」

冗談だったのか。園子ならあり得る話だったのに。

「園ちゃんは、その……」

「やつぱり、いざ緋月君が帰ってくるとどんな顔すればいいかわからないって。」

「無理もない話、か。目の前で人が刺されたんだ。無警戒だった自分をかばうようにして。生きているとしても、やはり難しいものだ。」

「いやそれアンタよ、刺されたのアンタ。」

「わかっていますよ。」

後頭部が痛いせいで寝返りがうてないのは辛いもんだが……さて。

「昇さんは、いったいどうしてそんなに無茶を?」

「仕事だから、かな。」

樹の質問に答えつつ、俺は考える。

仕事とはいえ、痛いものは痛い。物理的にはそれは当然だが、精神的にもくるものはある。もう少し、美しく解決できなかったのかと。判断を誤ったかあるいは、そもそも判断が遅かったのか。

「仕事だから……大ケガしていいんですか!？」

「樹ちゃん……」

「厳しいな。結果しか見てないからそんな言葉が出るのかな、とは思うけどね。」

「結果、だけ……」

「園子を護るための選択、それは何個もあった。いくつか間違えて、最後はああなった。あれでいいわけではない。もう少し何とかならなかったのか考えるさ。でも、あの時はあれが最善だった。それは揺らがない。」

「っ……」

樹の言い分はわかる。わかるが……それではいそうですねと言えるほど、世界は優しくなんてない。

「自分が傷つくことは、最善じゃないんよ、のぼるん。」

「園子……」

後ろから聞こえた声は紛れもなく園子の声だが……振り返ることができないから表情が見えない。だが、声音はどうしようもないくらいに今にも消えてしまいそうで……怖い。

「のぼるんは、それができちゃうから、やつちやうんだよ。できなかったら、やろうとすら思わないはずなのにね。」

「そのつち、もういいの?」

「心配ありがとうわっしー。大丈夫だよ。」

「無理はしないでね、園ちゃん。」

「ゆーゆもありがとね〜」

怖い。表情も見えるようになった。怖い。その恐怖は乃木園子そのものから来るものでなく、所作からくるものだ。俺でなければ分からないレベルの恐怖。現に、楓花でも気づけていない。

「緋月。アンタはまだ、自分がどれだけ他人にとって大事な存在なのかをわかってないところがあるわ。園子も教えてくれるだろうけど、これだけは勇者部の部長として言っておく。このままだとアンタは、いつか本当に！ひよんなことからころつと死ぬわよ!？」

「お姉ちゃん……」

先輩の声はいろいろな焦りや怒り、心配、そして両親が死んだと言われた日のことを思い出している。

「……人はいつか死ぬものです。それは確定してしまっていることです。」

「っ……！でもっ……！……」

「緋月昇にできることは全部やる。やらなければならぬことも全部。生きている限りはそれが続く。それが俺の選んだ道、いばらの道です。傷つかずに進むなんてことはできない。それ以外の道を俺は知らない。」

むくりと起き上がり、先輩の顔を、目を見据えて俺は言う。己すら切り捨てて、多数を、必要なものを生かす。それが大赦の在り方だ。

「それは……悲しいよ。のぼるん。」

「だとしても、これが俺だ。」

園子とは目を合わせないように、俺の在り方を話す。

「しばらく、のぼるんは休んでね。ふくちゃん、書史部をお願いするんよ。」

「わかりました。……お兄ちゃん先輩が来たら突き返します。」

「待て、俺は休むなんて一言も……」

「馬鹿でしょ昇。開くわよ、傷。そうでなくてもまだ頭痛が酷いんだから休んでなさい。これは園子からの命令よ。」

「……いつまでだ?」

「んー、のぼるんが完治するまでかなあ。そこまで、大人しくしてくれないと、私もおかしくなっちゃいそうなんよ。」

「っ……」

その笑顔には無理がある。目も笑っていない。だめだ。それは、その表情はだめだ。

「そうかい……わかった。わかったよ。」

「そのうち……」

「ひーくん……」

「さって、夜も深まってきたし帰るわ。」

「雪花……そうね。私も帰ることにするわ。友奈ちゃんは？」

「うん、私も一緒に帰るよ。またねみんな！」

「お姉ちゃん、私たちも……」

「ええ。夏凜、緋月をよく見てなさいよ。」

「言われなくても監視してるわよ。楓花も園子もいるし、こいつはまだ車いす。なんともなるわよ。」

「……俺の扱いぞんざいじゃないか？」

「お兄ちゃん先輩のやったことはそうなって当然のことです。はあ、苦労が増えてしょうがないですよ……」

「またねみんな」

その日、緋月昇は眠ることすらできず、深い思考の渦にとらわれていたのであった。